

第5回 石川県書写書道教育研究大会

目 次

1、挨拶・祝辞

石川県書写書道教育連盟会長 第5回石川県書写書道教育大会長	藤 則 雄	1
石川県教育委員会教育長	肥 田 保 久	2
小松市教育委員会教育長	木 下 健 次	3

2、第5回石川県書写書道教育研究大会要項 4

3、公開授業学習指導案

小松市立安宅小学校 教諭	板 橋 法 子	6
小松市立女子高等学校 教諭	東 野 洋 子	10

4、研究誌上発表

石川県立養護学校 教頭	平 杉 吉 次	13
小松市教育会書写研究会		15
金沢市立四十万小学校 教頭	加 藤 詩 郎	21
金沢市立四十万小学校 教諭	岡 部 浩 一 郎	21
金沢市立芝原中学校 教諭	古 本 佳 世	28
石川県立金沢錦丘高等学校 講師	本 多 美 千 子	32
金沢大学教育学部 助教授	押 木 秀 樹	36

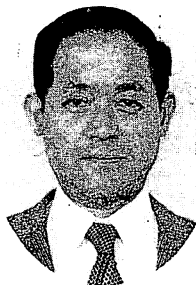
5、石川県書写書道教育連盟のあゆみ 45

6、平成6年度石川県書写書道教育連盟役員一覧 47

7、第5回石川県書写書道教育研究大会役員一覧 48

8、石川県書写書道教育連盟規約 49

ご 挨拶



石川県書写書道教育連盟会長
第5回石川県書写書道教育研究大会長

麻 貝 友 佳

このたび、石川県の各地で、書写書道教育にたずさわっておられます教育者・研究者のご参加をえて、第5回石川県書写書道教育研究大会を、小松市内の諸学校を会場として開催することになりましたことは、誠に喜ばしいことであり、研究のご発表をされます方々やご参加下さいました各位と共に、心からお慶びを申し上げたいと存じます。

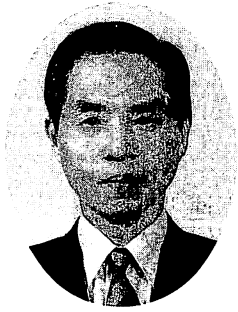
さて、幼稚園から大学に至るまでの、各校園・大学を、書写書道教育の一貫性・有機的連携性の目的をもって連盟化するという、全国に先がけての本会の結成は、発歩の当初はもとよりのこと、今日でも、他の県に見ることのできないことであり、また、他の教科でも知ることのできない、誠に有意義な組織でありますことは、衆目の一致するところとして、高い評価を受けているところであります。そして、今日に至るまでの5年有余の期間において、当初の連盟の目的どおり、授業研究を中心に据えて、石川県内の幼稚園・小学校・中学校・高校・大学・特殊教育諸学校の書写書道教育の発展のために努力され、連盟会員相互の親睦のためにも心を至してきたところであります。その成果は、徐々にではありますが挙がりつつあるところであり、今後の更なる発展に期待の持てるところであります。

また、当初、本研究大会の開催地をローテーション方式とし、或る特定の人達だけで運営されることなく、更なる将来への発展のためにも、輪番方式を目指してきましたが、これ迄は、何分にも発歩間もないということもあって、本大会の開催地が金沢地区に限定されてきましたが、ようやく小松地区という、金沢以外の地区でも開催できるようになったことは、事程左様に、本連盟の力量がついてきたことを意味し、会員諸氏のご協力の賜物であろうかと確信致しているところであります。

本第5回研究大会を目指して、今日に至るまで日夜研究発表のために研鑽してこられた本日の研究発表の先生方、本大会を成功裡に導くべく会場の設営等にご尽力下さいました実行委員の各位に、心からの敬意と感謝の意を表したいと思ひます。また、石川県下の各地より、本大会参加のために遠路はるばるご出席下さった先生方にも、その、熱意に敬意を表したいと存じます。

最後に、石川県書写書道教育連盟が、会員各位の不断のご努力とご協力とによりまして、今後ますます発展し、会員各位のご健勝と研究・教育のご発展とを心から祈念致しまして、第5回研究大会に当たってのご挨拶と致します。

(金沢大学教育学部長)



祝 辞

石 川 県 教 育 委 員 会
教 育 長 肥 田 保 久

第5回石川県書写書道教育研究大会の開催を心よりお祝い申し上げます。

本大会が今回で5回目という節目を迎えられ、県下の書写書道教育の発展に多大な功績を残してこられましたことに、深く敬意を表する次第であります。

昨今の科学文明の急激な進歩の中で、ものの豊かさに比べて心の豊かさが欠如しているという指摘を耳にしてからずいぶん久しいように思います。このような中、新学習指導要領が全面实施され、新しい学力観に基づいた授業実践が期待されているところであります。「書は人であり、人格そのものである。」とも言われるように、「豊かな心」が育まれるためには書写書道教育の充実は欠かすことができないものと考えます。石川県書写書道教育連盟が大会テーマに一貫して掲げられてきた「基礎・基本をふまえて」「豊かな心を育てる」ことは、まさに、この時代の社会の要請に応えられたものであります。

今大会では、「文字意識を育て、自ら学ぶ意欲を高める書写指導のあり方」というサブテーマのもと、小学校における公開授業が予定されているとうかがっております。自ら学ぶ意欲を高めるさまざまな手立てについてさらに論議が深まり、今後の教育実践について重要な示唆が得られることでしょう。また、高等学校における公開授業では、「古典との出会いを大切に感動を分かち合う心を求めて」とサブテーマにありますように、生徒たちが時代を越えて伝わってくる古典の魅力に心動かされる姿が見られるものと思われまふ。今大会での成果が、児童生徒の心を揺り動かす授業づくりへの大きな力となることを確信いたしております。

石川県書写書道教育連盟では幼稚園から大学までの6校種を含んだ研究組織を持ち、確かな書写力を基礎とし、個性豊かな表現力と鑑賞する力、書の文化と伝統を尊重する態度の育成などの研究実践が育まれてきています。このことは、本県の書写書道教育、国語教育に限らず、心豊かな社会がより確かに築かれるための、広くは生涯教育に向けての原動力となることでしょう。今大会での成果をもとにさらなる発展を願って止みません。

末尾になりましたが、今大会の開催まで準備に当たられました関係各位のご苦勞に深く敬意を表し、祝辞といたします。



祝 辞

小松市教育委員会
教育長 木下 健次

第5回石川県書写書道教育研究大会が、小松市立の2校を会場に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

石川県書写書道教育教育連盟が、平成2年の第1回大会より6年間、県内の幼稚園から大学までの6校種をつなぐ書写・書道の研究組織として互いに日頃の実践研究を交流し合い、また学校現場における書写・書道教育をリードし、多大の貢献をされてきたことに敬意を表します。

周知のように、先の指導要領の改訂により、小中学校における国語科が「言語の教育としての立場」を一層重視し、書写に関しても「表現」から〔言語事項〕へと内容の示し方が改められ、毛筆による指導が重視されるようになりました。

言うまでもなく漢字や仮名は長年毛筆によって磨かれ、今日の字形が定まってきたものであります。そして、文字は文化と伝統を伝えるための伝達手段としての役割と同時に、文字そのものが一つの文化として大切にされてきた歴史を持っています。文字そのものの美しさに対する意識や関心はわたしたちの伝統文化の特徴であります。

ところが、今日、わたしたちの日常生活において文字を書くことの機会が減少していることや、子ども達の文字の乱雑さや、丸文字・漫画字などの多さといった現状を考えると書写書道教育の重要性が改めて痛感されますし、それだけに本大会の成果に大きな期待を寄せるものであります。

本日、県内各地から参加されました先生方が、「基礎・基本を踏まえて、豊かな心を育てる書写書道教育」という本大会の主旨を十分に理解されて、各学校において一層の成果を収められるよう心から期待します。

最後に、本研究大会の開催のためにご尽力いただいた関係者の方々、研究授業や研究発表のために日夜研鑽を積まれた先生方に心から敬意を表します。

石川県書写書道教育連盟が今後益々発展され、時代の要請にこたえた実践を行われることを祈念して、お祝いの言葉といたします。

第5回 石川県書写書道教育研究大会要項

大会テーマ 基礎・基本をふまえて豊かな心を育てる書写書道教育
 — 文字意識を育て自ら学ぶ意欲を高める書写指導のあり方 —
 — 古典との出会いを大切に感動を分かち合う心を求めて —

記念講演 柳下昭夫先生
 東京家政大学講師、教科書研究センター評議委員・企画委員等
 前教育課程審議会委員、前国語審議会委員等

演 題 文字感覚を養い自ら学ぶ意欲を高める書写書道教育の在り方
 文字を書くことの指導は、これからの時代に生き充実した生活を営むための基礎基本である。このような視点から本研究大会テーマを踏まえ、これからの書写書道教育の在り方を考える。

期 日 平成6年10月19日(水)

会 場 小松市立安宅小学校
 小松市立女子高等学校

主 催 石川県書写書道教育連盟

後 援 石川県教育委員会
 小松市教育委員会
 石川県私立幼稚園協会

日 程

9:15	:45	10:35	:45	11:45	13:00	:30	14:15	:20	15:00	16:00
受付	公開授業 (市立女子高)	研究協議会1	昼食 移動	受付	公開授業 (安宅小)	全体会・研究協議2 (安宅小)	記念講演 (安宅小)			

公開授業 (高等学校 9:45~10:35 小学校 13:30~14:15)

校種	弊	題 材 名	授 業 者
高校	2	行 書「蘭亭序」	教諭 東野洋子(小松市立女子高等学校)
小学校	6	文字の組み立て方「街路」	教諭 板橋法子(小松市立安宅小学校)

研究協議会

	助 言 者	司 会 者	記 録 者
研究協議会1 高等学校 公開授業を中心に 10:45~11:45	県教委学校指導課指導主事 清水 實	県立水産高等学校教諭 鱒 喜代子	県立小松高等学校講師 本間 千恵 県立寺井高等学校講師 山本 尚美
研究協議会2 小学校 公開授業を中心に 14:40~15:00	小松地方教育事務所指導主事 寺島 浩 七尾市立石崎小学校校長 野村美智子	小松市立芦城小学校教諭 北 由起子	鹿島町立越路小学校教諭 北浜 信喜 七尾市立徳田小学校教諭 川崎 律子

公開授業の紹介

高等学校第2学年 行書「蘭亭序」 東野洋子教諭（小松市立女子高等学校）

活字体に慣れ親しんでいる生徒たちにとって行書の「古典」はややもすると難解なものとして目に映るかも知れません。生徒たちが、素直に古典を受け入れることができるような「出会い」が大切になっています。

そこで、今回、題材に「蘭亭序」を取り上げ、行書を単に楷書と比較して「点画の連続、省略などによる変化」としてとらえるだけでなく、「心のうちなる要求、感動、新鮮さ、そしてその実用性に起因したもの」として生徒がとらえられるようにできないものかと工夫された授業が行われます。

時代の変化の中で脈々とその時代に受け継がれて来た魅力、その時代その時代の人々から支持を集めて来たものは何か、今の時代において「蘭亭序」の何が面白いのかを生徒たちと探ります。

小学校第6学年 「街路」（文字の組み立て方）板橋法子教諭（小松市立安宅小学校）

6年生になると、学習量がより一層豊富になり、文字を書く速度がさらに要求されます。このような中で、正しく整った文字を書く力を育てることは重要な課題となっています。

この授業では文字意識を高めるために試書に重きをおき、自己の課題を明確にして、児童一人ひとりがめあてをはっきりと意識できるように工夫がほどこされています。また、自己評価をすることにより、自ら学ぶ意欲をさらに高めようと、評価カードや練習用紙が用意されています。

さらに、毛筆での学習の成果が硬筆文字にも生かされるように硬毛ペンによる応用練習も試みられます。

全体会（14:20~14:40）

司会者 林 昭悦（県立津幡高等学校教諭）

- ・会長挨拶
- ・祝辞（石川県教育委員会、小松市教育委員会）
- ・研究協議会2

第6学年国語科書写学習指導案

平成6年10月19日(水)

指導学級 小松市立安宅小学校6年2組

指導者 板橋法子

1. 題材名 文字の組み立て方(三つの部分)「街路」
2. 目標 三つの部分の組み立て方や各部分の譲り合いに注意して、「街路」を書くことができる。
3. 指導計画(3時間)
 - 第一次 三つの部分の組み立て方に注意して「街」を書く。……1時
(本時)
 - 第二次 各部分の譲り合いに注意して「路」を書く。……………1時
 - 第三次 「街路」を清書し、硬筆練習をする。……………1時

4. 指導にあたって

6年生になると学習内容が一層豊かになり、文字量も増加し書く速度も要求されるようになる。このため、多くの児童は字形などには気を配らず、ただ単に速く書くことに気を取られ、文字が粗雑になる傾向が強い。

正しく整った文字を書かせるには、漢字の組み立て方をもとにした字形について考えさせ、文字意識を高めていくことが重要であると思われる。

文字の組み立て方を大別すると、「上下から成る文字」「左右から成る文字」「内外から成る文字」の3つに分類することができる。この4月以降、「上下から成る文字、左右から成る文字」として「麦畑」、「内外から成る文字」として「谷間」を学習してきた。

本教材では、「左右から成る文字」の発展として「三つの部分から成る文字」を学習することになる。

男子16名、女子16名、計32名のクラスである。休み時間などは非常に活発であるが、授業中はなかなか進んで発表しようとする児童が多いようである。また教師から指示されたことはきちんとできるが、自分から進んで考えたり行動などしようとする面も少ないようである。

書写の学習に対してはほとんどまじめに取り組んでいる。しかし、児童の日常の文字を見ると、一画一画はていねいに書こうとするようになってきているものの、文字の左右の部分の大きさやバランス、各部分の譲り合いのところまでは意識が働いておらず、無造作な字形が多く見られる。また、6年生としては毛筆の筆使いにまだまだ不十分な点が見られ、書写を苦手としている

児童も少なくはない。

用筆法については、授業の度に指導はしているが週1回の授業ではなかなか上達しない現状である。そのためにますます書写嫌いを増やす原因にもなりかねないので、用筆法ではなくその授業の学習の目あてで評価し、不得意な児童も努力すれば上手になるという満足感を与えていきたい。

一人一人が意欲的に学習するためには、それぞれが自分の課題をはっきりと把握することが大切である。そのためには、児童にまず自分の目で教科書を見て試書させ、そして教科書と自分の感覚で「できた部分」「難しかった部分」などの比較をさせ、共通の問題を設定していく方法を取り入れてきた。

練習過程では随時練習用紙を使用しながら自己評価を繰り返し、自分の目あてに向かって意欲的に取り組ませていくようにさせたい。

また、毛筆による指導だけではなく、毛筆の学習が硬筆の学習にも随所に生かされることが課題となっている。そこで、本題材を通して毛筆での学習結果を硬筆でも清書するという作業をとおして、硬筆指導と毛筆指導との関連ある学習となるようはかっていきたい。

5. ①本時の展開

② 事後評価

三つの部分の組み立て方について理解し、正しく整えて書くことができたか。

☆ 資料

1. 書写がんばりカード

	文字	チェックポイント	試書	清書	硬筆	反省	先生から
が ん ば り カ ー ド	街	① 三つの部分の幅			街 術		
		② 真ん中の部分の高さ					
		③ 始筆のそろい			謝 測		
		④ 終筆のそろい					

2. ワークシート

- ①カゴ書き ②始筆位置 ③3つの幅指示 ④高さ指示

第6学年国語科書写学習指導案

題材名	文字の組み立て方 「街路」	本時の 位置	1 / 3
-----	------------------	-----------	-------

過程	学習内容	学習活動	教師の
			全体へ
導入	1. 「街路」について ①試書する。 ②学習の目あてを知る。	<ul style="list-style-type: none"> 筆順を確かめながら空書する。 半紙上半分に「街」と書く。 教科書などと比較しながら、問題点を見つける。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の題材「街路」を空書し、筆順を確かめさせる。 教科書を見てそれぞれの感覚で「街」を書かせる。 問題点を見つけさせるために、OHPの資料を提示する。
	三つの部分の組み立て方を知って「街」を書こう。		☆学習の規準 ①3つの部分の幅が等しい ②真ん中の部分が高い
展開	2. 一次練習をする。 ①かご字練習する。 ②補助練習用紙で練習する。	<ul style="list-style-type: none"> 練習用紙でなぞり書きをする。 段階別指導用練習用紙を使って練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習のねらいの確認をさせる。 個人個人の選択によって、能力に応じて練習用紙を選択する。
	3. 二次練習をする。 ①半紙に練習する。 ②批正する。	<ul style="list-style-type: none"> 半紙を上下に分け、それぞれ「街」を練習する。 相互にねらいに対して話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> より整えて書する気持ちを持たせるために、下の部分の上に書いた「街」について反省させる。 練習した結果からねらいに対してどうであったか話し合わせる。
まとめ	4. 清書する。	<ul style="list-style-type: none"> 試書の下の部分に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ねらいを再度意識させながら清書させる。
	5. 評価する。 ①カードに記入する。 ②作品を鑑賞する。	<ul style="list-style-type: none"> 試書に対して清書段階での様子を記入する。 1グループの作品を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習カードの順にしたがって記入する。 試書と清書を比較し、上達の様子を確認させる。 頑張った点などを発表させる。
	6. 応用練習をする。	<ul style="list-style-type: none"> 硬毛ペンを使って「街、測、謝、術」を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 「街」と同様に、三つの部分の組み立て方に気をつけて書かせる。

本時の ねらい	(関心・意欲) (表現) (理解) (技能)	自分なりに課題に向かって進んで学習しようとしている。 聞き手を意識して自分の考えを話すことができる。 三つの部分の組み立て方を見つけることができる。 三つの部分の組み立て方について、正しく整えて書こうとしている。
------------	---------------------------------	---

指導・援助 個に 応じて	評価の観点
<ul style="list-style-type: none"> 筆順が正しくされるよう机間指導する。 子供たち同士で問題点の意見の交換ができるようアドバイスする。 	<p>[関心・意欲]</p> <ul style="list-style-type: none"> OHP資料と比較し、自分の考えを持つ。 自分なりに課題を見つけて学習しようとしている。
<p>③ 1と2画目の始筆が縦に揃っている ④ 4、6、7、9画目の終筆が縦に揃っている</p> <ul style="list-style-type: none"> 大きなズレがないかどうか机間指導する。 選択度がよいかどうか、ズレが生じていないかどうか机間指導する。 問題意識が継続されているかどうか、机間指導を行いながら援助や賞賛など行う。 三つの部分の組立だけでなく、横画の長さや方向などにも意を配らせる。 三つの部分の組立の観点から見させる。 まとめの段階であることと、机間指導を行いながら援助や賞賛など行う。 	<p>[技能]</p> <ul style="list-style-type: none"> 必要な練習用紙を選択して、三つの部分の組み立て方について正しく書こうとしている。 <p>[技能・理解]</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎的事項に加えて、ねらいをはっきりする。 <p>[表現]</p> <ul style="list-style-type: none"> 練習結果から、自分の文字に対して見る目と考えを持つ。 <p>[表現]</p> <ul style="list-style-type: none"> 聞く人を意識した話をする。 仲間の意見をしっかり聞く。 (声の大きさや速度) <p>[理解]</p> <ul style="list-style-type: none"> 作品から、三つの部分の関係を把握する。 <p>[態度]</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習したことを本に硬筆にも生かそうとしている。

公開授業 高等学校芸術科書道学習指導案

生徒 小松市立女子高等学校第2学年
授業クラス 21ホーム女子28名
(芸術科書道Ⅰ)
指導者 教諭 東野洋子

1, 単元名 行書 題材 行書「蘭亭序」
教科書 光村図書出版「書道Ⅰ」
p, 36, 37

2, 単元設定の目標
「書道Ⅰ」の目標は、

書道の諸活動を通して、書写能力を高め、表現と鑑賞の基礎的な能力と態度を育てるとともに、書を愛好する心情を養う。

書道Ⅰでの行書の導入は、「能力の形成」「態度の育成」という両者の中で、時間数の少なさという言い訳とともに、4月入学早々の高校の授業に目を輝かせている生徒に対し、毎年毎年、試行錯誤を繰り返しながらもうまく指導できていないのが実情である。

今回は本校の体育コースの生徒28名のクラスですが、コースの事情により、全員書道選択という中で、各人の書道に対する興味の差にばらつきがあるが、「態度の育成」という点にまで授業を進められたらと思っている。

書道史の中でも大変興味深く歴史物語を含む(私個人の主観)この蘭亭序から、壮大な中国の歴史や書道史の流れ、そこに登場する様々な人々の気持ちや息づかいまでも感じ取り、その中で「行書」という書体をとらえることができればと思っている。

3, 単元の目標

- (1) 行書のさまざまな美しさを知り、行書の特質とその多様な美へ興味と関心を高める。
- (2) 行書の美を構成する要素・原理を理解する。
- (3) 行書による表現を理解し、古典の書に興味・関心を持つ。

4, 本時の指導目標

- (1) 蘭亭序の起筆に変化の多い用筆と気脈の貫通に注意して臨書させる。
- (2) 書風の相違は、作者の個性の相違から生まれるものであるが、書の歴史の中で、時代や社会の背景や事柄の影響によったものあることを理解させる。
- (3) (1)(2)を踏まえ、行書の特徴を内面から理解し表現できるようにさせる。

5、本時の学習指導（4時間中3時間目）

過程	時間	指導内容
導入	5分	◦準備、出席確認
	5分	◦前時までの学習内容の確認 （蘭亭序の古典としての意義を確認させる） ◦本時の学習内容の説明 （気脈の貫通ということを理解させる。）
展開	15分	◦文章の内容把握として、全員で読みと内容を確認させる。 ◦気脈の貫通、起筆の変化の学習にあたり、ひらがなで練習させる。 ◦ひらがなで速く書くことによる線の変化、文字の大小の変化について理解させる。
	20分	◦各自、適宜選択した個所を試書させる。 ◦試書して気付いた点を発表させる。 ◦注意点を反省の上再度書かせ、確認させる。
まとめ	5分	◦次時の予告 歴史の中で生きた書として行書の美を再度考えさせる。

6、評価

行書の単元総時間数18時間は6時間行書の基本として「集王聖教序」で学習し、行書の表現力の学習として蘭亭序を含め古典三点を6時間の設定となり、あと6時間は創作と、大きく三段階となっている。この流れの中で

◎生徒の興味、関心が作者の書に対する思いと一致し、古典の中で生きた書として感じられるか。

◎起筆の変化、気脈の貫通が自然と生きた言葉（文字）の流れの中で表現されるか。

Memo:

[The body of the memo is extremely faint and illegible. It appears to contain several paragraphs of text, but the characters are too light to be transcribed accurately.]

研 究 誌 上 発 表

肢体不自由教育における書写指導について

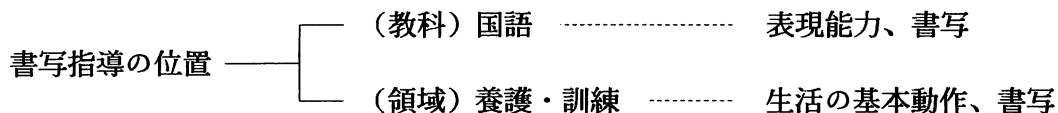
石川県立養護学校
教頭 平 杉 吉 次

近年特殊教育諸学校で学ぶ児童生徒の障害の状態が重度化、多様化してきていることは皆様ご承知の通りである。特に、肢体不自由養護学校では、障害の重い重複障害児も多く在籍するようになり、教育内容や方法等においても、これに対応して変わってきたと言える。

本校に在籍している肢体不自由児のほとんどは上肢や下肢、体幹のいずれかに障害を持っており、中でも脳性まひ児にあっては身体全体に運動機能障害をもっている場合が多いので、あらゆる生活の場でさまざまな制約を受けていることが多い。

さて、書写の指導において、「文字を正しく整えて書くことができる。」という初期の目標があるのは、どの学校も同じである。ただ、本校でこの目標を満たす児童生徒は、小・中・高等部を問わず、準ずる教育、それに下学年適を受ける子だけである。従って、本校児童生徒総数78人中、17人(22%)が対象となる。あとの61人は重複障害を伴っており、本来の書写指導は不可能に近い。

ここで、本校の書写指導の位置づけについて述べてみよう。



まず第1に、書写の指導は国語科においてである。しかも、毛筆より硬筆が主となる。指導の観点、姿勢の留意、鉛筆の持ち方、筆順、字の形、大きさ、配列・配置、更には、書体等についても十分適切な配慮と指導を行っているところであるが、身体機能、とりわけ上肢の運動・動作に障害がある子が多いだけに、中学部、高等部になってくると、正しく、美しく、速く書くというねらいから離れることが目立っている。

近年、生徒自身進んで、視写、書写練習をしていく姿も少なくなった。また、ワープロ、パソコンでの文字、文章づくり、ノート整理も実践されつつあるが、書かれた文字の個性、人柄、直筆の味わい、親しみを覚える字体が少なくなっていることに危惧を感じているひとりである。いずれにしても、根気強く指導して行かねばならぬ分野である。

第2の指導分野として、養護・訓練の時間がある。障害が軽い子でも1週3時間、重い子で毎日の1週6時間の訓練がある。しかも、障害の種類や程度によって、いろいろな訓練に分けられている。動作訓練、機能訓練、感覚訓練、運動訓練、それに、これらをミックスした運動・動作訓等が上げられる。最後に上げた運動・動作訓に所属した児童生徒において、生活の基本動作を習得、改善させるために書写練習、言語訓練、移動訓練等をしていくものである。書写練習の変形として、タイプアート等も実践に取り入れた訓練もあるが、文字を正しく美しく速く書くというねらいもあるところから、ノートに鉛筆で根気よく練習する分野がある。指や手の機能、腕の機能を改善させる方法として以前から取り入れているところである。

本校の児童生徒にとって、文字を正しく、美しく、速く書くことは、永遠のテーマであるが、たとえ、ワープロ、パソコン時代到来といえども、キーを押すのは、やはり指先の仕事であるから、基本的な指の訓練、手、腕の機能を改善させると同時に、文字を知らねば、今日の機器を使用することは出来ない。指を使い、全身の動きを活発にさせる働きは、この書いて覚えることから始めるのが大切なことなのである。

本校の教育活動は書写を見るまでもなく、何事も遅々としてはかどらないことが多いが、これを打ち破る努力の中で、子供等が社会自立可能となることを学ばせている。

文字意識を育て、 自ら学ぶ意欲を高める 書写指導の在り方

小松市教育会書写研究会

1. はじめに

近年、児童を取り巻く言語環境が多様化している。大人たちの間では、ワープロの普及により、文字を書く機会が少なくなり、字形や筆順についての関心が薄れ始めている子ども達の間では、マンガ字が流行したり、文字が正確に書けなかったりするなど、文字の乱れが生じている。そこで、児童の言語環境を整え、文字への興味・関心を持たせるとともに、児童一人一人が自己の書写力を見つめ直し、より正しくより整った文字を書こうとする態度を育てることが必要であると考えられる。

指導要領の改訂により、社会の変化に対応できる能力の育成が重視されているが、これからの学校教育は、生涯教育の基礎を培うものとして、自ら学ぶ意欲を高めることが大切であると指摘されている。教師から言われるままに書くのでは、正しく整った文字を進んで書こうとする児童の意欲や態度は養われない。これらの現状からして、児童の主体性を大切に し、児童の学ぶ意欲を高めるための指導の在り方について研究を進めることにした。

2. 児童の実態

昨年度、ある学校の五年生（32名）の書写に関するアンケートを行ったところ、次のような結果を得た。

①「あなたは書写の授業が好きですか。」

好き（9名） ふつう（10名） きらい（13名）

②「好きな理由は何ですか。」

きれいな字になりたいから（6名）

筆に墨をつけて書くのがおもしろいから（3名）

③「きらいな理由は何ですか。」

練習してもうまにならないから（6名）

道具の準備や後かたづけが面倒だから（5名）

手や服が汚れるから（4名）

これにより、きれいな字を書きたいと願っている児童も多い反面、自分の字は下手で

練習してもうまくなれないと思込み、意欲を失っている児童が多いことがわかる。これは、学習課題がはっきりせず、また練習結果からうまくなったかどうかの判断ができないので、書く喜びを味わえないものと思われる。

3. 自ら学ぶ意欲を高めるために

(1) 主体的な学習方法

児童が書写学習意欲を喚起し継続していくためには、従来のような教師中心の指導ではなく、児童の主体性を生かした課題解決的な学習方法を取り入れていく必要がある。児童自らが課題を見つけ、それを解決していくような学習の進め方の工夫や、楽しく学習に取り組めるような教材の開発が求められる。ただ書くのではなく、この教材を通して何を学ぶのかという問題意識をしっかりと持ち、児童が思考力を働かせて学習に取り組むようになったとき、児童は書く喜びを味わうことができ、もっと書きたいという意欲を持つであろう。このように考えると、児童の学ぶ意欲を高めるためには、まず、児童に学習の課題をしっかりとつかませることが大切であると思われる。

(2) 課題把握のための方法・教材・教具の開発と工夫

ア. 試書

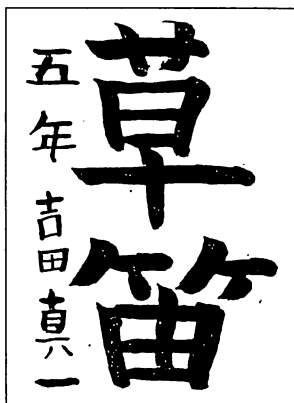
授業の始めに試書をすることにより、児童は自分の書写力の実態を見つめ直し、自己の課題に気づくことができる。試書のさせ方としては、

- ・教科書を見ながら書かせる
- ・教科書を見ないで書かせる

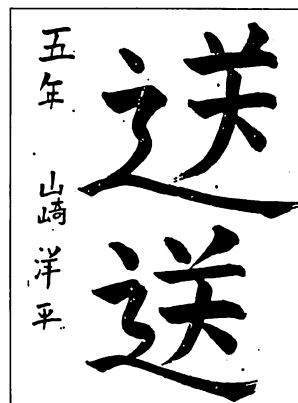
の2つの方法がある。試書と清書を比較させることにより、その時間の学習の成果がよくわかるので便利である。



<手本を見せずに書かせた試書>



<同じ児童の清書>



<上半分は試書>
<下半分がその時間の清書>

イ. 拡大文字

教科書の手本を大きく拡大したものである。これを黒板に貼ると、みんなで文字のポイントを指摘し合えるので便利である。

ウ. 文字カード

いろいろな文字について外形を囲ったり、中心線などの補助線を引いたもので、文字を視覚的に理解するのに役立つ。

エ. OHPによる資料

文字の部分を切り離して移動させることが容易にできるので、文字の大きさや組み立て方を実感的に理解させるのに便利である。

オ. 点画ピース

文字の一面一面を切り離したもので、これを組み立てさせることにより、点画の方向や接し方など細かい部分まで文字を見る力を育てることができる。

カ. トラペンアップ

児童の書いた文字をトラペンアップにとりOHPに映して見ることにより、児童の問題点や学習の成果を知ることができる。

(3) 学ぶ意欲を高めるためのワークシートの活用

児童が自己の課題に達成するためには半紙だけの練習ではなかなか難しい。そこで児童の課題に適したワークシートを与え、児童が自分で考えながらめあてに向かって学習できるよう工夫することが必要である。ワークシートとしては

- ・かご書き
- ・骨書き
- ・字形のわくを示したもの
- ・補助線の入ったもの
- ・文字の一部分だけ書いてあるもの
- ・中心線を示したもの

などが考えられるが、めあてに応じて作成し、必要に応じて使用させるとよい。

また、ワークシートの使用にあたっては、

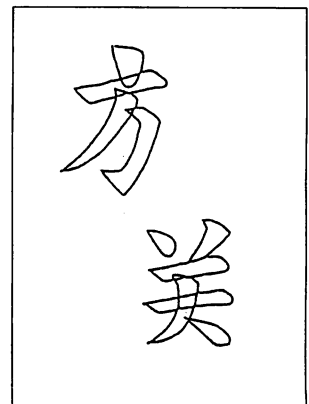
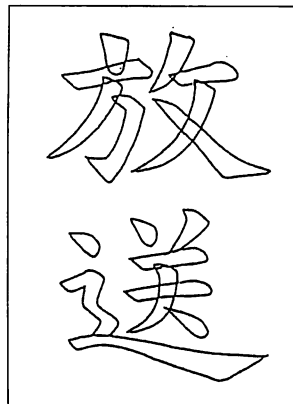
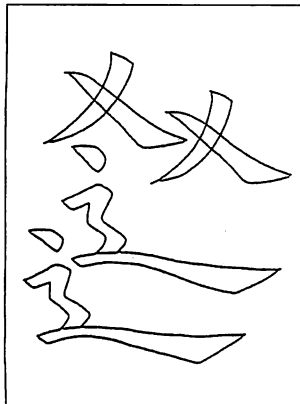
- ・ポイントを絞ったワークシートにする
 - ・かご字から骨書きへ、骨書きから補助線のものへ移るなど、簡単なものから難しいものへの段階を考える
 - ・難しい筆使いは部分練習を取り入れる
- などの点の留意することも大切である。

（ひの）と（せいし）> <（たの）しる（こ）>

□	□
□	□
□	□

理	長	目
理	丁	目
理		

フルトペンで書いてはいけません。



ワークシートの使用により、児童は、課題に向かって自分の力で学習を進めることができる。また、練習は一人一人書くスピードに違いがあるが、速く書けた児童は次のワークシートの練習ができるので、個人差に応じて時間を有効に使うことができる

（４）意欲を高める評価法について

児童の意欲は、自己の課題が到達できたり、友達や教師からほめられたりしたときさらに高まるものであると考えられる。そこで、課題に到達した成就感を味わわせ、友達同士認め合い、高め合うことができるような評価の工夫が必要である。

ア．自己評価

自ら学ぶ力を育てるためには、課題意識を持って練習した文字がどれだけ課題に到達したかを自分で見極める力をつけることが必要である。自己評価により、児童は成就感を味わい、次への課題解決への意欲を持つことができる。そこで、自己評価しやすいようなカードの作成も意欲を高めるためには重要である。

し	し	し	し	し	し
し	し	し	し	し	し
し	し	し	し	し	し
し	し	し	し	し	し
し	し	し	し	し	し
A	A	A	A	A	A

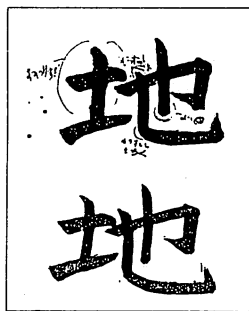
かたかなのれんしゅう
なまゑ(のうま)はや
がしゅうあそび
はらい、おれ、まがり、とのれんしゅうをしよう

< 1年生の自己評価と批正 >

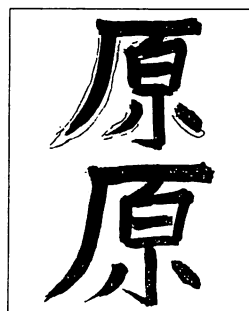
文字	チェックポイント	評価	筆	反省	先生の
原	1 たれの持ち方	△	原	な た な り 方 か う し に	よ か ん け り し た た な に け
	2 たれの方向	△	原		
	3 三画目は中心より右	○	原		
	4 八画目は三画目の下	○	原		
	5 一画目と二画目の部分長い	○	原		
合計点数		3	5	よい	うらやましい

名前(加藤明彦)
書字がんばりカード

また、清書だけでなく、練習過程においても、練習用紙にうまくできたところに自分で○をつけたり、うまくできなかったところに△をつけたり、コメントを書いたり、上から直したりするなど、自己評価と批正を繰り返す態度を育てることも大切である。



「地球」での自己批正



「高原」での自己批正

イ. 相互評価・全体評価

自己評価だけでは児童の意欲は持続しない。友達や教師の暖かい励ましの言葉がさらにがんばろうとする意欲を持たせるものである。隣同士で上手になったところを評価したり、全員の作品を全体で鑑賞し、成果を認め合うことも必要である、また結果のみでなく、練習過程に対する評価や励ましの言葉も忘れてはならない。

(5) 硬毛関連指導について

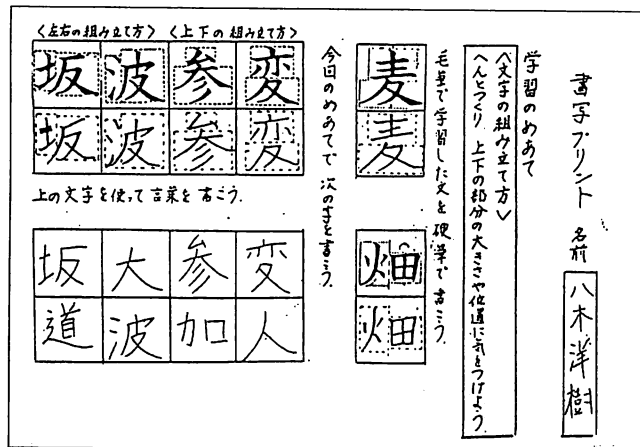
日常の書写活動は硬筆が中心である。文字の乱れに対し、児童に面の長短、方向、接し方、交わり方、文字の中心、外形、組み立て方などの文字意識を高め、正しく整えて書かせるためには、毛筆による指導をしっかりと行い、それを硬筆に生かす態度を育てることが必要である。学習指導要領でも「毛筆の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うものである」と明記されている。そこで、効果的な硬毛関連の指導を行うことが必要である。硬毛関連指導にあたっては、

- ・一時間の授業に毛筆と硬筆の指導を組み入れる。
- ・別の時間に毛筆を生かした硬筆の指導をする。

という2つの場合が考えられる。また、硬毛関連指導の内容としては、

- ・学習した同じ文字を硬筆で書かせる。
- ・発展教材として、同じ要素を持つ文字を硬筆で書かせる。
- ・課題把握の際、硬筆文字の中から問題をつかむ。
- ・鉛筆だけではなく、マジック、サインペン、チョーク、硬毛筆などいろいろな道具で書かせてみる。
- ・国語ノートに書かせたり、小黒板に書かせたりして、書く場面を増やす。

などさまざまな方法が考えられるが、児童に常に学習成果を硬筆でも生かしていこうとする意識を育てていくことが大切であると思われる。



4. 終わりに

児童の文字意識を育て、進んで書こうとする意欲を高めるためには、一時間一時間の授業を大切にすることが必要である。45分という時間は非常に短い。年間計画をきちんと立て、この時間では何を指導するのかというポイントがしっかりとしていなければならない。またワンパターンの授業ではなく、児童の興味を引き、書く意欲の湧くような教材・教具の工夫も開発していかなければならない。教師側が常に書に対する感動を持ち続けることが、書写好きの児童を育てることになるのではないだろうか。

チーム・ティーチングにおける書写指導

— 6学年の実践を通して —

金沢市立四十万小学校 加藤 詩郎

岡部浩一郎

1. はじめに

本校は今年度からチーム・ティーチング方式(略してT. T)による指導法を取り入れることになった。科目については、個別指導や特に習熟を要するものという職員総意の下、書写もその中の一つとして挙げられ、時数との関連から、現在6学年においてT. Tによる書写指導を行っている。

指導にあたっている二人については、書写の分野に長けている者ではなく、現在においても手探りの状態で実践を行っている次第である。しかし、その中で①『児童一人一人を生かす』という視点に立つこと、②T. T方式で効果的と考えられる方法を模索し、改善・修正を繰り返すこと、という2点に重点を置いて実践していこうという共通理解をしている。

今回は、書写指導にT. T方式を効果的に取り入れる工夫と書写において児童一人一人を生かす工夫の2点に絞り、実践を通して考えられることを、誌上をかりて述べることにする。

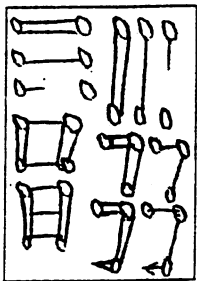
2. 指導の重点

(1)段階別による指導を取り入れる。

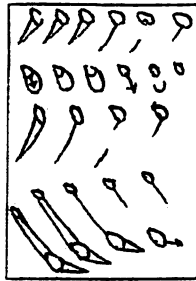
小学校最高学年とはいえ、6学年の児童の個人差はかなり大きい。塾に通っている者とそうでない者では、文字を書かせるとその差は明確である。その差は何であるかを考えてみた。そして、基本的な『筆使いによる差』、さらに、長さや太さ、へんとつくりの位置関係や大小関係等の『バランス感覚による差』の2点が大きな要素ではないかという結論に至った。

以上の事を踏まえ、実際の指導においては、『筆使い』の習得を主体とするプリントと文字を書きながら『バランス』(長さ・太さ・位置・大きさ等)の習得を主体とするプリントを用意する。(図1)

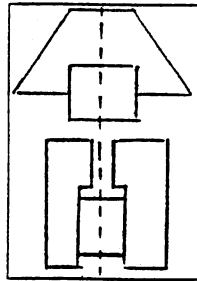
図1 各種プリント例「谷間」



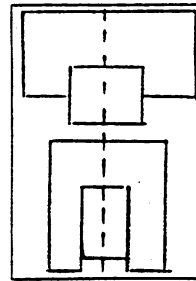
筆使い①



筆使い②



バランス①



バランス②

ここまでは、従来の指導においても行っていることであるが、さらに『筆使い』を主体とした練習を行うグループと『バランス』を主体とした練習を行うグループに分けて、それぞれのグループをT. T方式によって受け持つという方法を取るのである。(写真1)



写真1
グループ分けでの
支援・助言の授業風景

グループ分けについては、当初指導者が決めていたが、次第に自分で練習したい観点を考えることができる児童においては、自らが決定するようにしている。例えば、今まで筆使いが上手だと思っていた児童でも、文字を書いてみて筆の運び等に困難を感じた場合には、『筆使い』グループで練習を行うという具合である。

また、6学年で初めての『筆使い』がある単元においては、『筆使い』グループと『バランス』グループというグループ分けを行わずに、『筆使い』の段階をクリアしたら『バランス』の段階に行くという方法を取っている。そのとき、初めは二人の指導者は共に児童の『筆使い』のみを指導し、クリアする人数が一定の数(我々は約10人と決めている)に達した場合にグループに分けての指導を行うようにしているのである。

(2)文字への『こだわり』を持たせる。

児童の大半は、書写という科目を重要教科として考えていない現状がある。また、習字の塾に通っている児童においても流派等の関係からか、学校における書写を軽視する場合もある。しかし、書写の目標の重要な部分として、『文字への細心の注意』という意味あいのことが掲げられている。某かの事に注意をはらうという姿勢は、書道の流派に関係なく大切なことであり、さらには、他の科目においてもこの姿勢は必要であると考えられる。

そこで、どのような手立てを取れば、文字への『こだわり』を持たせることができるのかということを考えてみる。

一つは、教科書の手本を素材としながら、「上手に見えるのは何故か?」ということ、自分の作品の比較などから考えさせるという方法がある。そのときに、まず児童が着目するのは、『筆使い』である。「太く力強い。」とか「曲がり方がきれいな線だ。」等の意見が多く出る。

図2 「麦畑」の例



そこで、OHPで故意に一画一画の位置のバランスを崩した事例を見せることにより、『バランス』の重要性に気づかせる。

その時点で、一画一画をバラバラにしたプリント(図2)を用意し、児童に切らせ、正月の遊びにある福笑いのように組み立てる作業を行わせるのである。

もう一つの方法として取り入れているのは、『レタリング』である。明朝体のみではあるが、漢字の基本的な線のパターン(横線、縦線、はね、はらい、さんずい、しんにゅうetc)を教え、手本を見ながら、仕上げるという段階を行わせる。毛筆では消すことができず、硬筆においても絵画のスケッチのように複数の線で仕上げるということはできないが、レタリングは下書きにおいては絵画スケッチや定規等で図形を書くように行うことができる。そのため、筆使用的なことは、丁寧さのみに注意すればほとんどの児童が出来るようになり、児童の注意のほとんどはバランス的なことへと向けられるのである。これらの、丁寧に仕上げることと、バランスへの注意が、文字への『こだわり』とつながると考える。このレタリングを取り入れる手法は、習字塾へ通っている児童においても新たな手法で文字を表現するために、更なる関心となっている。

(3)進度の度合いを評価とする。

全ての児童が、より手本に近づくような文字を書くことができるようにするというゴールは変更するつもりはないが、児童の個性や実態からこのゴール達成はなかなか困難である。また、段階別に綿密な手順を踏んでも、『筆使い』の練習段階よりも『バランス』の練習段階の方が上位であるという意識になってしまう。この意識は、児童のみならず指導者も当初持っていた。「筆使いが合格したら、次はバランス練習ですよ。」という言葉にも表れているであろう。

しかし、練習に没頭している児童の姿を観察していくうちに、真剣さの度合いは『筆使い』練習の児童も『バランス』練習の児童も変わらないということに気がついたのである。逆に、『筆使い』練習の児童の方が黙々と真剣に行っているような場に多く出くわしたのである。それらの児童の共通点は、「筆の入り・動き・止め(はらい、はね)に注意すれば、お手本のような線になるのか。」という驚きと発見である。確かに、筆慣れしていないために、力の入れ具合は不得手であるが、どのようにすると上手になるということが自分なりに明確になっているために、自分自身のゴールに向かう意欲につながっているのである。

そこで、従来の評価のように、ほとんど全員に文字を書かせ、用紙に丸つけや朱墨で書いた作品を最終評価として掲示するのではなく、『筆使い』のみの作品であっても、「今の自分はこれだけ上達した。」という達成感や自信を持たせるためにも、文字の作品が最終という

固定観念を取り去り掲示するようにしている。この場合でも、初めは文字の作品が上位という意識があり、筆使いを作品とする児童には抵抗があったが、上手だと思っていた他の子の作品と自分の作品を対比し、「筆使いの差はあまりない。」と気づいたときに抵抗感がなくなってきたようである。今では、文字を作品としている児童の間からも、「筆使いは～君の方が私よりていねいだわ。」等の言葉が聞かれるようになっている。

また、児童の作品を授業後に持ち帰り、朱墨等で評価し、後日配布し、掲示するという従来のパターンではなく、書いた作品をその場で評価し、児童自身に掲示させるという方法を取っている。このことは、「何事もタイムリーに行うと利点が多い」という原則に基づいている。一人の指導者では時間的に困難なことであっても、T. T方式によってこの困難をクリアできるのである。このタイムリーな評価はその時間その時間の意欲を持続させるのに効果的であり、さらに、児童が一人一人自分自身の次時のゴールを決めることができる目安ともなり得るのである。

3. 指導の実際

(1) 単元名 文字の組み立て方(かまえ)

- (2) 目標
- ・かまへの位置や大小の関係に注意して、毛筆で「谷間」という文字を書くことができるようにする。
 - ・かまえのある文字への注意を硬筆にも向けることができるようにする。

(3) 指導計画(総時数4時限)

時	ねらい	主な学習の流れ
1時	これからの学習目標を持たせるために新たな筆使いとバランスで注意する部分を明確にできるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・「谷間」という文字を硬筆で書き、毛筆の手本との対比をし、これからの課題を決める。 ・課題を決定したら、どんな練習をしたいかを一人一人が考える。 ・「間」の「はね」の部分の筆使い練習をする。
2時	筆使いグループとバランスグループでの練習を行わせる中で「谷」	<ul style="list-style-type: none"> ・筆使いのみの練習を行う。 ・グループに分かれる。
3時	の横に広がる部分や「間」のもんがまへの大小関係に気づかせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・バランスに注意するグループにおいてはプリントで練習する。
4時	毛筆で学習したことを既習事項とし、「かまえ」のある文字を重点的に硬筆やレタリングで練習させ、更なる注意につなげる。	<ul style="list-style-type: none"> ・書き方ノートを書く。 ・バランスを主体とした評価を受け、再度書き直す。 ・レタリングの手本を見ながらプリントに書く。

(4)実践例(2時)

- T. 今日書く文字は分かりますね。(と言って「谷間」の毛筆手本を黒板に貼付する)
- C. この前は「間」の「はね」をみんな練習したけど、今日は「谷」の「右ばらい」がむずかしいと思う。その練習がしたい。
- C. 私は、最初から「谷間」という文字の練習をしたい。
- C. ぼくは、まだ縦線の「止め」がうまくできない。横線ならできるようになった。
- T. 今日は、2種類の『筆使い』練習プリントと3種類の『バランス』練習プリントを用意してきました。(長机に並べる)
- T. 自分の練習したいプリントを選んで下さい。ただし、すぐにバランス練習をする人は、まず一画一画がバラバラになっているプリントを切り取って、位置を確かめてから、書く練習にうつって下さい。

(二人の指導者は机間巡視をしながら、姿勢や筆使いを中心に支援を行う)

- T. 明らかに失敗した場合は別として、3枚書いたらそのうち自分が良いと思う作品を一枚持って来て下さい。

[ここから、T1は『筆使い』グループ、T2は『バランス』グループに分かれて支援・助言をする]

- | | |
|---|--|
| T1. まだ入りと終わりが同じ太さだね。
だんだん力を入れると終わりの方が太くなるよ。 | T2. 谷の左・右ばらいの角度が急すぎますね。
手本をよく見て、まずこれから直しましょう。 |
| T1. 君は、筆使いはほぼ良くなっているね。
右ばらいだけがまだ完全でないから、もうバランス練習にうつってもどうですか? | T2. 「間」のもんがまえの長さに注意して下さい。これは、このプリントで直ると思いますよ。 |
| T1. 筆を入れるときに、ななめに入れるのは分かっているね。でも、動きの時に手首を動かしてはいけません。
(実際に手を持って書く支援をする) | T2. バランスによく注意しているのは分かります。でも、筆使いが雑になってきたね。一度、「はね」と「はらい」だけを練習したらどうですか? |
| | T2. 君はもう下にプリントを敷かずに、手本を見て書いてみましょう。 |

[ここで、一度筆を置かせて、グループ同士の情報を聞き合う]

- T. では、何か困ったことがあったら言って下さい。
- C. 幅を狭くしようとしているんだけど、どうしても幅が広くなってしまふ。
- T. これはバランス練習をしている人からだけど、原因は線の幅が太くなっているからじゃないのですか。細い線も書くような筆使いの練習をすればいいと思うよ。
- C. 右ばらいの最後がうまくできない。
- T. うん。これはみんなそうだと思うよ。右ばらいって筆使いの中でも最も難しいののの一つなんだ。うまくできている人にちょっとそのコツを聞いてみましょうか。
- C. 入りはあまり強くしないで、だんだん力を入れて終わりは一番力を入れて止めます。そして、そこから角度に注意してだんだん力をぬいていくようにしています。慣れてくれば、けっこう早くできるようになります。
- T. 詳しい説明ありがとう。最後の力をぬくときに、筆の先だけに注意するのではなく、根元の方にも注意するときとうまくいくと思いますよ。

T. では、残りの時間どんどん練習して下さい。

C. ほんとだ、うまくいった。

C. もうプリントなしで挑戦してみようかな。

C. まだバランスにはいけないな。やっぱり「はらい」と「はね」はむずかしい。

4. 考察

(1) T. T方式による指導について

初めは、二人の指導者がひっきりなしに、机間巡視ばかりを行い、個別的に指導していた。この時は、きめ細かい指導であると自負していた。しかし、続けていくうちに上手な児童は退屈になり、時間をかけて指導する児童は限られてきて、それらの児童も進歩がほとんどなくやらされているという印象を受けるようになってきた。全員が同じスタートラインからスタートするという固定観念が児童のやる気を奪っていったのだと思う。

そこで、思い切ってグループに分けようというアイデアが浮かび、さらに、段階別のプリントを児童自らがセレクトできるという方法を取ってみようということになった。確かに、習字のスタート時期の3学年ではこのような方法は取れるとは思わない。しかし、個人差が大きい6学年においては、その個人差を嘆くのではなく、逆に利用することで、今まで減退していた意欲や向上心を引き出すことができたのである。このことは、T. Tならではの効果であったと考える。

ただ、地道な机間巡視もやはり大切である。意欲を引き出してから行うなら、時間的にも一人で行うより効果が上がるし、指導者自身が今後のためにも参考になる事柄を児童から聞くことができるのである。

(2) 一人一人が生きる工夫について

T. T方式によって、よりきめの細かい個に応じた指導ができるようになってきた。しかし、一人一人が生きるというのは、児童自身が意欲を持って主体的に取り組むということではないかと考える。児童の意識として、字の上手・下手は絵や歌の上手・下手のようなもので、仕方がないという向きがあった。このことは、我々の大きな課題であり、如何に意欲を持たせるかということについて常に考えていかなければならない。手を変え品を変えながら様々な手法を取り入れることも大切だろう。ただし、そのときには指導者側が常に一貫したゴールがなくてはならないのである。

我々は、その最終ゴールを「手本に近づこう」という意識から「文字へのこだわり」につながる『児童の意識の変革』である。」と決めた。これは、文字のバランス的な注意と捉えられる傾向があるが、今まで無頓着に線として書いていた習字を、筆使いを意識するというのも、このゴールに当たるのではないであろうか。ゴールを狭くすると、その分達成する人数は少なくなるのは当然であり、安易なゴールでは達成人数は多くなるものの、児童自身達成感が

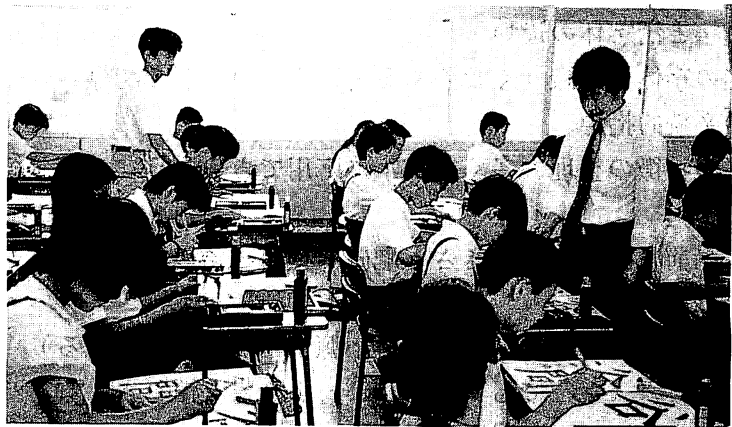
得られなくなる。その点、このゴールは個に応じているものと捉えている。

今回、述べた内容や方法はベストではなく、まだまだ様々な手法があるであろう。しかし、小手先の技術に走るのではなく、ゴールに向かう真剣な児童をじっくりと観察し、改善点を児童から聞き出しながら、意欲的にゴールに向かうことができるような支援をこれからも模索し続けていきたいと考える。この姿勢を持続することが、児童に伝わり一人一人が生きるという目標に近づくのではないかと考えるのである。

5. 終わりに

二人の指導者は共に学担ではなく、級外である。そのために、時間的な制限は当然のこと、自分たちの指導法が児童の上達につながるというシビアな面があるために、当初気負いがあったと思う。そのときに、その気負いを取り払い、リラックスしたムードを作り出してくれたのは、各クラスの担任の方々であった。その担任の方々の言動が児童に伝わり、我々を快く迎えてくれるというムードになっていった。確かに気負って厳粛な姿勢も書写には必要な場合があるが、やはり技能を高めようとするときには自主性が必要である。我々から変な気負いや「こうでなくてはならない」的の固定観念がなくなった時に、児童は真剣に取り組むようになったのは事実である。

これからは、その時間その時間で児童の技能を高めようという『プロ意識』と児童をありのままに受け入れようという『謙虚な気持ち』の両方を持ち続けながら、我々を素直に受け入れてくれた担任の方々やその児童にさらなる理解を得られるように、一貫したゴールの下に成り立つ指導法の工夫を考えていきたい。



2, 3 年生における書写の授業確保の試み

金沢市立芝原中学校 教諭 古本佳世

・はじめに

一昨年来、金沢泉丘高校の林昭悦先生らから、今年は書かんなんね、と言われ続けて来た以上、もうとどのつまりと観念し、鳴和中学校の山森校長先生からの原稿依頼を引き受けたのだが、今回は本当に苦しかった。今までこの研究集録の係として、他の多くの先生方に原稿をお願いし、当然のように玉稿を頂いておりながら こう書くのは誠に申しわけないのだが、書けなかった。いざとなったら授業実施でも何でもあるだろうに、と思われるだろうが、書きたいこと、書くべきことがいつまでたっても出てこない。

現在、1年生13名、2年生19名、3年生15名という小規模の学校にいるため、授業の中では、個々の生徒に個別にかけられる時間は多い。全員での話し合いや発見学習、相互批正なども勿論行うが、これだけ少ないと 練習の最中に机間巡視をして手取り法で直してやったり、何人かずつ（或いは全員でも可）教卓に呼んで、直してやるという昔ながらの寺子屋的なやり方が、一番効果的な気がしている。

そこでは、特に変わった工夫をしている訳ではない。あえて言うならば

1年生では

- ・用具の使い方 置き方（忘れ物防止のため、用具は持ち帰らなくてもよいことにしてもらっている）
- ・書き文字と活字体の違い
- ・平仮名の字体の認識（くせのある子に正しい字形を認識させる）
- ・行書の系統的指導

（行書の特徴の整理、多くの文字に応用できるような、部分練習と小、細字での発展練習）

- ・文字（名前を含む）の大きさと配置（横書きでの中心のとり方も含む）

2年生では

- ・行書に調和する平仮名の筆使い（字源や筆脈に注意させる）
- ・硬筆での行書（1年でも勿論行うが、より書き慣れさせる）
- ・文字の由来（いろいろな書体や、生活の中の書に関心をもたせる）

3年生では

- ・硬筆での楷書の確認（受験対策も考え、筆圧や字形を再度点検する）
- ・文字の鑑賞（古典の比較により、いろんな書きぶりがあることに目を向けさせる）
- ・作品作り（生活の中での様々な書の良さや紙面構成の妙を知り、心に残る言葉などを書かせる）

ということ、重視してきたつもりではある。ようやく今年から、2年生にも毛筆用具を準備させ始めたので、今後は2、3年生でも、教科書を使ってもっと充実した授業ができればいいと思うが、実際のところ書写に当てる授業時間はやはり少なくなりがちである。

本来なら指導要領に明記された時数どおり、教科書で教えれば良い（それに当たっては、金沢市教育委員会の「教育課程の基準、国語科」に、2、3年の書写の扱い方を、野田中学校の干場和子先生が書いておられるのを参考にすると良い）のだが、どうしても私のように旧来の国語指導で手いっぱいの方はどうしたらよいか。

そこで思い出されたのが 金沢市教育委員会の指導主事をしていらっしやう頃の福島茂先生のお話だった。作文も、同じように時数が明記され、どうやってあの厚い国語の教科書の中味をこなしながら、作文の時間を確保していけばよいかという私達の問いに、確か、1時限全て使って作文をさせるばかりでなくて良いとおっしゃったように思う。国語の教科書の教材に沿って、感想を書かせたい教材であれば、その感想を書く時に、作文としての観点を与えて書かせれば、それは作文の授業でもあり得るといった内容であったと思う。そして、それを成功させるには年間の指導計画をもつことと。

それでは書写も同様にすることはできないだろうか、そこで考えたのが、以下のような国語の授業の中での書写の取り組みである。

・2、3年生の国語の授業の中で

<2年生>

月 単元、学習内容 （国…光村の国語教科書、書…光村の書写教科書）

4月（国）1 学習のしかたを工夫する・漢字の学習1

↓

（書）P2～4で、楷書の字形の整え方を確認し、正しく丁寧に文字を書く。

5月（国）2 表現の豊かさ・短歌・その心

↓

（書）P10、11、47を参考にして、気に入った短歌を、行書を交えて書いてみる。

7月（国）読書1・北の国から

↓

（書）P28を見て、シナリオを行書で、配列よく書く。

9月（国）4 平和への願い・字のないはがき

↓

（書）P43を見て、はがきを行書で、文字の大きさと配置に注意して書く。

10月(国) 表現に学ぶ

↓

(書) P 29、46を見て縦書きと横書きの違いをつかみ、自作の詩を横書きでまとめる。

11月(国) 6 古典に親しむ・思いをつづる「枕草子」

↓

(書) P 27を手本にして、行の中心や行頭に注意しながら、行書とそれに調和する仮名で書く。

12月(国) 6 古典に親しむ・漢詩の風景

↓

(書) P 30、31を読んで、漢字と仮名の由来を知り、いろいろな書体の用途や効果について考える。

1月(国) 表現の広場

↓

(書) P 44、45を参考にして、興味をもった言葉や調べたことを 用具や書体を選び工夫してまとめる。

2月(国) 7 人間のきずなを

↓

(書) P 17を参考にして、自分にとっての座右の銘を書いてみる。

< 3年生 >

月 単元、学習内容 (国…光村の国語教科書、書…光村の書写教科書)

4月(国) 1 学習のしかたを工夫する・漢字の学習1

↓

(書) P 34~37を参考にして、古典を鑑賞すると共に、楷書の字形に注意して楷書を正しく整えて書くようにする。

6月(国) 2 表現の味わい・俳句への招き

↓

(書) P 48、49を見て、いろいろな書式を知り、気に入った俳句を短冊や色紙に書いてみる。

9月(国) 言葉の窓(2)・漢語の働き

↓

(書) P 40、41、45を参考にして、いろいろな漢語を楷書と行書で書く。

10月(国) 表現に学ぶ(2)

↓

(書) P 46を参考にして、自作の詩を、行書とそれに調和する仮名で配置よく書く。

12月（国）6 古典を味わう・君待つと、「万葉・古今・新古今」

↓

（書）P 54～56の古典を鑑賞し、文字文化について考える。

1月（国）表現の広場(4)

↓

（書）P 46～49を参考にして、6編の詩の内、気に入った詩やその一部分を、用具と配置を考えて、作品としてまとめる。

3月（国）未来に向かって

↓

（書）P 52、53を参考にして、夢や未来像などを寄せ書きの形にまとめる。

・おわりに

国語と書写を結びつけてみたが、この他にも、学活と書写を結びつけて、P 4、5を参考にして学活の記録や新聞作りをさせたり、係や班でP 12、13にあるような掲示物を作らせたりもできる。

しかし、あくまでも本来は書写の授業を時間割に組み込んで、単元相互に、系統だった指導を行うことが理想であり、その点で教科書の教材配列も重視していきたいと思う。さらに、毛筆を使う時は、少なくとも1時限は書写として時間を確保し、十分に書かせてもやりたい。

今後、さらに試行錯誤を続けるだろうが、国語科の中の書写がおろそかにならないようにしていきたいと思う。

刻字指導の実践

石川県立金沢錦丘高等学校

講師 本多 美千子

1、はじめに

本校は書Ⅰ（1年生2単位）、書Ⅱ（2年生1単位）を履修することになっている。書道Ⅰでは、書写から書道への導入期でもあり、用具・用材の説明、用筆法等からスタートし、初めて体験する臨書を書道史を通して幅広く理解させることに重点を置いている。1年生はなじみのない古典を自分の目で受け止め、その作者、時代背景を知り、感性をつかむようになるまでには時間を要する。あせらず、生徒の自主性を尊重しながら指導することになっている。折にふれ生徒の作品も貼り出して相互批評なども試みている。自分の作品を冷静に見ることにより、古典を意識し、臨書することが好きになり、鑑賞力の向上にもつながってくれるよう願っている。

書道Ⅱでは、1年で学習したことを基礎とし、自由に表現出来る楽しみを味わうための教材に篆刻をしている。作業を伴う学習なので、生徒の興味・関心も大きいようだ。生徒は何回も気に入るまで、繰り返し練習していることから毛筆学習の回帰的サイクルになり、好結果につながっていると思う。

更に、昨年から、授業に刻字を取り入れてみることを考慮して、部活動の生徒に指導している。手間がかからず、費用がかからない方法で出来る刻字なら高校生でも可能だということがわかり、実践過程をまとめてみた。

2、刻字指導と毛筆指導の関連性

私たちが、書の歴史として学んでいる甲骨文字（篆書体）は、四千年の長い歴史を持っている。古典を臨書している碑帖のすべては刀をもって刻していることから、刻字の歴史はたいへん古く、筆意は刀意によって今日伝えられている。史的にみても、密接な関係があると思われる。

昭和51年に学校教材映画「篆刻・刻字」が製作された。その時に、書家の今井凌雪先生が次のように解説されている。

『この映画は篆刻・刻字の技法と製作過程、並びにその美を紹介したものである。文字を刻すことは筆の働きを丹念に追うことであり、それを厳しく要約することでもある。当然、毛筆による書作と表裏一体をなす。篆刻と刻字の正し

い理解と適切な指導に役立ち、生活と書、書の表現法等の問題について考える手がかりとなることを願っている。』

刻字を学習することにより、半紙だけで臨書する以外に刀意を味わうことが出来る。書稿づくりについても、書の作品製作と全く同じで、彫るという二次的な仕事があるので、考慮して書かなくては良い作品にはならない。毛筆をさらに詳しく理解することが出来、臨書に対する意識も高まり、関わりは大きいと思われる。

去年は表札づくりだけを実践したところ、今回は校内の文化祭に展示したいとの要望で、時間配分等を考慮しながら製作した。

3、手順（実践記録）

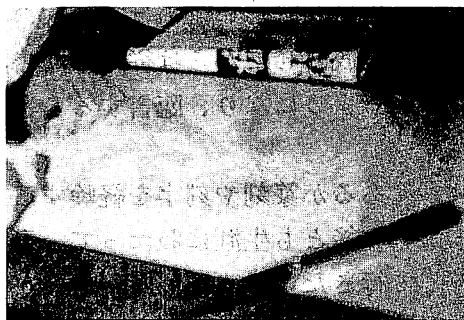
本校は書道教室がないので、騒音は他のクラスに迷惑になる。ノミを使わずに彫刻刀だけで出来る刻字ということで、色紙大の作品に挑戦してみた。板材は厚板よりも重量感は少なくなるが、薄板を使用した。

(1) 書稿づくり（2時間）

各自の好きな古典から2字程度を半紙で臨書させる。彫るという二次的な仕事を考慮して書くことが大切なので、陽刻には細め、陰刻には太めで書くように伝える。彫る文字の原点は書稿にあるので、気に入るまで推敲を重ねさせる。

(2) かご字・のり付け（1/2時間）

筆意をどこまで彫ることが出来るか（かすれ、にじみ）などを考えてかご字をとる。彫るときの実線となるので、小筆を使って、ていねいに縁取りする。乾いたら板に貼る。文鎮を板の中央においてかご字を貼る。板に糊をつけてから、ナデ刷毛でかご字の上をなで押さえる。



(3) 運刀（2時間）

のりが完全に乾いたら彫り始める。

彫刻刀だけで表現するので、のみを使用した場合の作品の出来具合の違いはあらかじめ見本を見せて説明しておく。

刀意を大切にす。全員陰刻をすることになったので、カマボコ彫り（内側2本仕切り、中央が中高になる）と船底彫り（凹形に彫る）を指導した。



(4) 着色（1時間）

かご字紙を濡れた布で湿らせて、かご字紙をはがす。乾いてから下地にサンドペーパーで着色しやすく整える。

文字には胡粉を使用したので、文字の外に胡粉がはみ出さないように、凹部分に気をつけて入れる。バックに色を塗る。

各自、好みの色を塗る。（水干絵具を使用した。）薄めの絵具を数回塗り重ねるとまだらにならない。



4、おわりに

指導してみて、小時間でも多い時間でも、用具・用材の取り扱い等を工夫することにより、それぞれに当てられる時間数に応じた指導が出来る教材だと思った。何よりも、作品が完成した時の生徒は異常なほどの喜びようで、「疲れた！」を連発しながら、満足そうな笑みを見せてくれた。生徒達は自ら創造する喜びと、長い歴史と芸術的な奥深さを持つことを知り、書の作品が完成した時よりも喜びは大きかったようだ。

刻字は書くことに加えて彫るという魅力があり、基本になっているのは書稿なので、真剣に取り組める教材であることを実感した。刻字を完成させてからは従来の臨書活動に戻ってみると、古典を今までと違った角度からみれるようになり、臨書することが以前よりも好きになったとの感想も聞かれた。

刻字の指導の仕方については、反省すべき点は多々あるが篆刻や刻字を経験することにより、毛筆学習の向上に結びつくことがわかった。今後とも生涯にわたって、書を愛好する生徒が多くなってくれることを願って指導して行きたい。

生徒作品

鍛治敏弘

尚文和

三平

和樂全

一期一会

花

玄遠

一期一会

諧象

温故知新

書写指導を考える上での 手書き文字研究の視座に関する試論

金沢大学教育学部 押木秀樹

1. はじめに

書写書道教育の未来のために、現時点において何を研究しておくべきなのだろうか。書写教育およびその研究の場面において、経験や感覚を頼りにした方法はこれまで通り重要なものとして捉えつつ、それを補強するものとして「科学」が必要であるという考え方は、かなり以前より出されている。筆者の手元の文献*1を見る限りでも、既に20年以上が過ぎている。この間、書写指導を教育学という見方で捉えるという点においては進歩していると言えようが、書写教育の基礎的な部分の研究はまだまだというのが現実であろう。すなわち書写指導の「方法論」は進展しているが、「目的目標論」・「内容論」の進展は乏しく、それらのレベルアップに不可欠な、基礎としての手書き文字自体の研究が不足しているのではないかということである。第7回書写書道教育学会滋賀大会における課題研究が「書字学（仮称）構築への提言」であったことも、そのあらわれと言えよう。筆者も、将来の書写教育を見据えるため、手書き文字自体に関する基礎的研究による基盤づくりの必要性を感じている。

現代は横書き書式の普及から始まりワードプロセッサの普及にいたるまで、手書き文字周辺の変化が著しいことが諸処で述べられている。筆者は先に、この時期の手書き文字の変化等について研究するための方法論について、提案*2をおこなっている。これに対し、現代手書き文字を考察する上での「視座」のようなものを望む声が聞かれる。本稿は、将来的な書写教育の基盤としての手書き文字研究の必要性を踏まえ、現代の手書き文字の位置づけを考察する中で、手書き文字研究の課題を明らかにする初期の試みとして記すものである。

2. 周辺事項の変化

書論・書道史研究の第一人者である杉村は、言語と形象の相互関係などに言及する書道史研究のための優れた方法論*3を発表している。その中の作品論について述べた部分において、次の記述がある。

まず書作品が実際に制作されるに当って使用された用具用材（例えば甲骨と小刀、石と鑿、簡牘や紙と筆墨など）、書作品として表現された形式（例えば碑碣、尺牘、巻軸、冊頁、条幅、扁額、対聯、屏障、扇面）、またその作品が制作されたいきさつや伝来のあとも予め了解しておく必要があります。

もちろん、杉村の方法論は芸術作品を対象としたものではあるが、手書き文字を研究対象とする場合、この三点を踏まえることは必要不可欠であると考ええる。筆者は、これを現代手書き文字を考える上で次の三点としてまとめておきたい。

- ・用具用材
- ・書字形式
- ・書字目的

なお、これらのうち用具用材と書字形式は以下に考察し、書字目的に関しては章を改めて考察していく。

文字を何らかの形で送り出す場合、その方法として「書く」「彫る(刻む)」「鑄込む」などは、2000年以上前からおこなわれている行為である。もちろん、その際の用具の変化、甲骨・青銅器や簡牘類から紙といった文字を位置付ける素材と、筆・刀等の筆記具にまとめられるものの変化も、文字に影響を与えていると考えられる。これらについて現代に直接関係しない事項は、青銅器については松丸*4ら、その他については阿辻*5等をご参照願いたい。

さて、現代における用具用材の変化は、大変化としての、

毛筆	→	硬筆
(和紙・唐紙の類)		(洋紙)

と、比較的小変化としての、

万年筆	→	ボールペン(フェルトペン)
鉛筆	→	シャープペンシル

があげられる。このうち、毛筆から硬筆への移行は、明確な線引きは困難なものの、すでに80年程度が経過しており、その移行期における変化は既に終了しているかも知れない。ただここで難しいのは、現代においても書写指導における手本の文字等は、毛筆はもちろんのこと硬筆も、毛筆で培われた字形を基本としていることである。その点からは、移行は終了していないとすることができるかも知れない。逆に、現実には日常書かれている文字は、必ずしも書写の手本のような字であるわけではない。その意味からは、一般人が使用している文字の字形においては、移行のかなりの部分が済んでいるという見方もできよう。

これら用具用材の変化という事象についても、手書き文字への影響として諸方面から考察をおこなう必要がある。たとえば、筆記具の変化によって、次のような事柄の変化が生じるであろうことが容易に想像できる。

- ・姿勢
- ・筆記具の持ち方
- ・筆記速度
- ・筆記時の疲労
- ・字の大小

・字形 (→ 読みやすさ)

さらにこれらを対象として、教育という視点のみでなく、現実の使用においてどのように変化しているかという視点が必要である。上記のうち筆記具の持ち方を例にあげるならば、酒井*6は大正期の水戸部らの硬筆書き方指導に関する文献によって、毛筆から硬筆への移行期における指導の状況を明らかにしており、貴重な研究だと考えられる。残念ながら、移行期の「持ち方」の実際を現時点において調査することはできないが、どのように指導したかという視点のみでなく、実際にどのように筆記具が持たれていたかという視点も必要なわけである。鉛筆からシャープペンシルへの移行に関しては、小中高校時代に鉛筆のみを用いた世代と、シャープペンシルも含めて用いた世代との字形等実態の差異を調査するなどの方法は可能である。

つぎに、書字形式の変化として

縦書き → 横書き

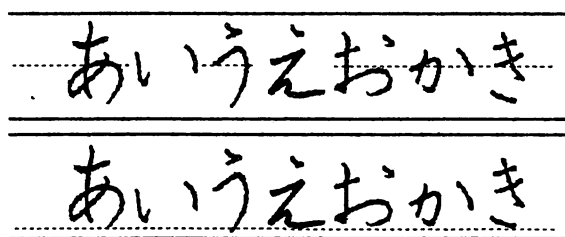
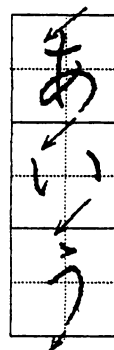
と、

罫線の幅の問題

があげられよう。横書きへの移行に関しては、漢字・かなともに縦書きに適した形で成立したことは、特にひらがなにおいてその第一画目の始筆と最終画の終筆の位置および終画の形状、あるいは連綿の仕方によって明らかである。

この字形がそのまま横書きに適するか否かを提起する論著は少なくない。その他、現在の書写教科書において、横書きする際の文字の中心（上下方向）を上下の罫線の中心に合わせて書く例を示したものと、下の罫線に揃えて書く例を示したものとが見られる。いずれが、合理的で横書きに適した形であろうか。また、実際に罫線のある紙に書かれている文字配置は、いずれの場合が多いだろうか。読みやすさ・書きやすさの点から実験をおこなうべきであろうが、実際に多くの人々が用いている形式がより合理的であるという考え方もできるであろう。私見では、

下の罫線に揃えて書かれたものを見る機会の方が多いように感じられるが、あくまで主観的なものでしかなく、客観的な調査研究を行わなければ何もいうことができない。これは一例であるが、以上のように用具用材・書字形式に関して踏まえておくことが、今後の調査研究の課題となろう。



3. 手書き文字の目的性

筆記具の変化に関し、毛筆・硬筆移行期の明確な線引きが困難であることを先に述べた。この理由の一つは、学習時の筆記具の変化を持って移行とするか、生存中に新しい筆記具を実用的に用いたか否かをもって移行とするかという基準の問題がある。また一方、同時

点においてある場面では毛筆を用い、ある場面では硬筆を用いるという時期があることにもよる。ノート・原稿などでは比較的早い段階から硬筆筆記具が用いられ、民間企業等から官公庁へと硬筆筆記具が広まっていったわけであるが、どこで使われたことをもって基準とすべきか。このことは、文字を書く目的によって手書き文字とその周辺の諸要素が変化することを意識させる。現代においても、目的によってシャープペンシルとボールペンが使い分けられることは言うまでもない。次に、目的性と手書き文字に関して考察を行いたい。

まず手書き文字に限らず、文字は「書く」「読む」という行為、基本的には伝達行為に係わるものであり、この伝達を広義に捉えれば、

(送り側) (認識側)

- ・ A → A (忘備録・日記などを想定)
- ・ A → B (手紙などを想定)
- ・ A → 特定の多数 (掲示物・回覧物などを想定)
- ・ A → 不特定の多数 (多くの出版物を想定)

のように考えることができそうである。このほか、文字の習得段階において、学習のために「書く」場合や、何らかの内容を記憶するために「書く」という場合も有り得よう。ただし、本稿はこれらの厳密な考察が目的ではないことから、詳しくは他の専門書に任せたい。また、 $A \rightarrow B$ の場合などの、 A B の親疎の問題などもあるが、筆者の先の論考に述べているため省略したい。

さて、認識する側の「読む」という行為は、歴史的に見ても大きな変化があるようには思えない。ところが、送り手側の「書く」に関しては、さまざまな変化が考え得る。単なる手書きのみでは $A \rightarrow$ 多数>の伝達が図りにくい。そのため、

- ・ 拓本
- ・ 活字印刷
- ・ 木版印刷
- ・ 写植

といった送り手側の方法があらわれてくる。ただ、これらの方法は、手間がかかるためプライベートな場面での使用は難しく、やはり $A \rightarrow A$ $A \rightarrow B$ といった伝達では、純粋な手書きが残ることになる。また、印刷技術が発達したからといって、書き写すという行為自体はともかく、読み手が手書き文字を見る場面が減少したとは考えにくい。なぜなら、木版印刷の時代までは、手書きした文字を印刷することも少なくなかったからである。手書き文字を考察する場合、手書き文字と印刷という区別に加え、印刷用文字(字体、字形、スタイル)の存在の有無も重要な要素と言えよう。すなわち、比較的時間がかかっても読みやすく統一感の取れる印刷用文字と、多少読みにくく統一感がなくとも書きやすい手書き用文字の存在である。ここで、読む側にウエイトが置かれた文字であるか、書く側にウエイトが置かれた文字であるかという視点が得られそうである。

印刷と手書きに限らず、漢代を考えてみると、いわゆる漢隸／八分隸などは筆記に時間

がかかっても読みやすく美しく、多くの簡牘の文字は多少読みにくくとも速書きが可能であると考えられる。ここで、受け取る側の視点として、「読みやすさ」に加え「美しさ」という要素を加えて考えてみよう。

漢碑の文字： 美しさ・読みやすさ > 書きやすさ

簡牘の文字： 書きやすさ > 読みやすさ

という構造が成り立つといえよう。また、初唐の碑、たとえば歐陽詢書丹の碑をイメージするならば、

碑の文字： 美しさ ・ 読みやすさ > 書きやすさ

版本の文字： 読みやすさ > 美しさ > 書きやすさ

その他の文字： 書きやすさ > 美しさ・読みやすさ

などの構造が成立しよう。先ほどの<読む側にウエイトが置かれた文字><書く側にウエイトが置かれた文字>に加えて、<見ることにウエイトが置かれた文字>を加えてみたい。漢・唐碑に限らず、現代においても入社時の履歴書は本人の手書きを求める企業が少なくない。これは、「書（字）は人をあらわす」という言葉が現代においても生き続けていることによっても考えられる。また、いわゆる書展における作品には文字が書かれているわけだが、これは「読む」というより「見る」といった方が適切である。以上をまとめておこう。

<読むことにウエイトが置かれた文字>（略-読むための文字）

<書くことにウエイトが置かれた文字>（略-書くための文字）

<見ることにウエイトが置かれた文字>（略-見るための文字）

これらが、目的により優先されることになる。例えば、<読むことにウエイトが置かれた文字>は、統一性の取れた文字で読みやすさ・正確さが優先される公的な場面や、その読みやすさから<A→特定・不特定の多数>の伝達で優先される。<書くことにウエイトが置かれた文字>は、その速さや簡便さから、メモなど<A→A・B>といった比較的狭い伝達で用いられることとなろう。また、芸術作品としての書はもちろんのこと、人柄を思いながら読みたい私信などでは<見ることにウエイトが置かれた文字>という要素が優先されよう。

さてここで、現代における文字による伝達として、「活字・写植」と「手書き」とのメリット・デメリットを考察してみる。

活字・写植	手書き
字形・構成の安定 (読みやすさ)	字形・構成の不安定 (読みにくい可能性有り)
個人性がない	個人性の表出
手続きの難しさ	手続きの簡略さ

同一のものを大量に作成する際に、活字・写植を用いる方が優位に感じられるが、現代においては手書きの文字も容易に印刷可能であることから、上記には含めなかった。手書きは「読みやすさという点」においては活字に劣る場合があるというデメリットもあるものの、手続きの簡略さ、すなわち特殊な用具を必要とせず、時間もかからないという点、そしてそこには個性（見るという要素）があるという点において優れている。

次に現代において活字・写植は基本的に楷書が用いられ、また手書きは学校教育において楷書と行書が取り上げられている。手書きの場合の、楷書と行書を比較してみる。

楷書	行書
字形・構成の安定 (読みやすさ)	字形・構成の不安定 (読みにくい可能性有り)
書字時間がかかりがち	書字時間が比較的短い

の構造があろう。このように比較した場合、楷書は印刷用文字との共通点が多く、

印刷用文字 : 手書き (楷書) : 手書き (行書)

 <---読むための文字---> <-----書くための文字----->

 <-----見るときの文字----->

の構造が考えられる。

この活字・写植 ↔ 手書き (楷書 ↔ 行書) の構図は、ワードプロセッサの登場により変化が見られることになる。先ほどの活字 (写植) と手書きの表にワードプロセッサを当てはめたらどうであろうか。また、ワードプロセッサの出力 (プリンターフォント等) は、印刷用文字 (明朝体) である楷書が基本になっているが、それを手書きの楷書・行書の表に当てはめたらどうなるだろうか。

ワードプロセッサ
字形・構成の安定 (読みやすさ)
個性がない
手続き簡略 (中間)

(印刷 - 手書き)

ワードプロセッサ
字形・構成の安定 (読みやすさ)
書字時間は比較的速い

(- 楷書 行書)

このように考えてみると、「印刷 (活字・写植)」と「手書き」との比較においては、ワードプロセッサは基本的に「印刷 (活字・写植)」に近いが、手続きの簡略さから言うところでは個人的な利用が可能であるという点で手書きに近い。またワードプロセッサは、基本的

に楷書が出力されるわけであるが、時間的には行書以上に速く書く（入出力）ことが可能である。手書きは、手続きの簡略さ、時間もかからないという点、そしてそこには個人性（見るという要素）があるという点において優れていた。しかし、ワードプロセッサの登場によって、印刷に比べれば圧倒的に簡便であり、作成に時間もかからないことから、手書きの明らかな優位性は個人性（見るという要素）でしか明確に言えないというところまで来ているのではないだろうか。先の〈読むため〉〈書くため〉〈見るため〉という三要素のうち、〈見るため〉を例外として、〈読むため〉〈書くため〉という要素は大きく変わる可能性を持つと考えられる。

4. 目的性とそれに適した文字（字体・字形等）教育

アメリカではタイプライタが普及し、ビジネスレターはタイプライタ、パーソナルレターは手書きという区分が極めてはっきりしている。日本における手書き文字の目的性は、どのように考えたらよいだろうか、またワードプロセッサの普及はどのような変化をもたらすであろうか。

〈読むことにウエイトが置かれた文字〉－統一性の取れた文字・読みやすさ・正確さ

・公的な場面

・〈A→特定・不特定の多数〉

〈書くことにウエイトが置かれた文字〉－速さや簡便さ

・メモなど比較的狭い伝達

・〈A→A〉〈A→B〉

〈見ることにウエイトが置かれた文字〉－個人性・芸術性

・芸術作品としての書

・人柄を思いながら読みたい私信

先に、楷書は比較的読むことにウエイトが置かれた文字であり、行書は読むことにウエイトが置かれた文字であるとして位置付けた。ワードプロセッサがアメリカにおけるタイプライタ（英文ワードプロセッサも含む）同様の普及がなされるなら、〈読むための文字〉を手書きする必要性は減少するのではないかと考えられる。とすると、〈書くための文字〉に重要性が増すことになるかも知れない。その際、仮に〈書くための文字〉である行書指導が軽視されていたらどうだろうか。自然な成り行きとして、各自が〈読むための文字〉として習得した楷書を速書きする工夫（意識的・無意識係わらず）を行い、統一性のない字形の増加を招く危険性がある。

また、現在の書写指導は統一性を求める方向性を持っていると言えよう。正確で読みやすい文字を指導するためには、有効な方法といえよう。しかし、上記以上にワードプロセッサが普及した場合、ちょっとしたメモ等にもワードプロセッサの方が便利になる場合も

あり得る。この場合、手書き文字の意義は、〈見るため〉という要素に限定されることになる。アメリカにおけるパーソナルレターの例に加え、芸術としての書がその目的ということになるだろう。その際、統一性のみにとらわれた書写指導は有意義といえるだろうか。もちろん、文字として十分に読めるという意味での統一性は必要であろうが、個人性を無視しては、その目的性の変化についていけないと言わざるを得ない。同じ国語科の読解指導において、正確に読みとる力ばかりでなく、感動を呼ぶような文学教材を扱うように、書写においてもなんらかのプラスアルファが必要なのかも知れない。

5. まとめにかえて

以前より時折、書写指導において学習指導要領以上に、表現や感動、また子どもらしさやそのらしさを重視すべきであるという意見が聞かれる。筆者は、行書指導や個人性の重視を例としてあげたが、本稿においてこれらを主張したいという意図はまったくない。あくまで例である。もし、これらを主張しようとするならば、手書き文字の使用場面について目的性との関係で調査研究し、客観性のあるデータとして提示しなくては、説得力がないからである。どのような場面で手書き文字が用いられているか、その際の手書き文字の字形はどのようなものであるか。そういったことを明らかにしていくことが、今後の書写指導の目的目標論・内容論を向上させる基礎研究となっていくと考える。どのように研究したらよいか、その一例として先にあげた筆者の論考がある。

本稿にあげた周辺事項の変化、目的性のほか、さまざまな要素から手書き文字研究の視座が存在しよう。将来的には、手書き文字とその周辺を構造化した形で、手書き文字研究の視座をまとめたいと考えている。さまざまなご意見がうかがえること、優れた論考の出現を祈りつつまとめたい。

<文中で紹介しなかった参考文献>

藤枝：『文字の文化史』，1971，岩波書店

研究紀要『木精』，兵庫教育大学学校教育学部附属実技教育研究指導センター語学教育分野 書写・書道研究室

*1 久米：“書写・書道科教育学の構想”，広島大学教育学部附属高校『国語科教育研究紀要』第4号，1971

*2 押木：“手書き文字研究の基礎に関する諸考察”，『書写書道教育研究』第7号，1993，全国大学書写書道教育学会

*3 杉村：“書道史研究の方法に関する一つの試論”，『書苑彷徨』第三集 p.3-29，1993，二玄社

-
- *4 松丸：“殷周青銅器と銘文の製作技法を探る”，『墨』第90号 p.64-67, 1991, 芸術新聞社
- *5 阿辻：『知的生産の文化史』，丸善，1991
- *6 酒井：“書字の姿勢・用具の持ち方に関する研究（2）”，『書写書道教育研究』第8号，1994，全国大学書写書道教育学会

連 盟 の あ ゆ み

連 盟 役 員 一 覧

大 会 役 員 一 覧

連 盟 規 約

石川県書写書道教育連盟のあゆみ

1987. 1. 23 有志が集い県下に校種一貫した書写書道教育研究組織設立に向けて懇談する会を発足させ
(昭和62年) る。(1988. 2. 26迄に9回の会合を開く)
1988. 4. 22 石川県書写書道教育懇談会と改称し第1回の会合を持つ [金沢大学教育学部書道演習室]
(昭和63年) (1991. 10. 17迄に24回開催する。)
1989. 8. 29 石川県書写書道教育連盟設立総会 [ホテル六華苑]
(平成元年) (平成2年度に第1回石川県書写書道教育研究大会開催することを決定)

平成元年度 石川県書写書道教育連盟役員 (敬称略)

名誉顧問	金子曾政<元金沢大学学長>
顧問	南和男<石川県教育長>
相談役	北西正二 坂口敏 田島庄吉 久田久信 水田茂良 横西清
会長	藤則雄<金沢大学教育学部長>
副会長	[石川県教育委員会学校指導課長] 三宅正敏 [金沢市小学校教育研究会書写部長] 河本隆成<金沢市立馬場小教頭> [金沢市中学校教育研究会習字部長] 大野重幸<金沢市立金石中校長> [石川県高等学校教育研究会書道部会長] 佐藤政俊<金沢女子高校長> [石川書写の会会長] 山田泰正<鹿島町立越路小校長> [金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者] 法水光雄<金沢大学助教授>
理事長	[金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者] 兼 任
副理事長	: 幼・保部: 嘉門久直<森本幼稚園長> : 小学校部: 森川登夫<津幡町立中条小校長> 谷村修次<小松市立蓮代寺小校長> : 中学校部: 松寺淳照<金沢市立森本中教頭> : 高校部: 中山武久<津幡高校教諭>
監事	吉田一郎<小松市立向本折小校長> 木本峰生<七尾市教育委員会学校教育課長>
理事	: 県教委学校指導課: [小学校・中学校(国語科書写)担当指導主事] 永井志津子 [高等学校(芸術科書道)担当指導主事] 高沢幹夫
* 金沢地区	: 幼・保部: 青山洋子<みどり・かわい幼稚園副園長> : 小学校部: 林道子<南小立野小教諭> 中川晃成<館野小教諭> : 中学校部: 干場和子<野田中教諭> 古本佳世<野田中教諭> : 高校部: 林昭悦<金沢女子高教諭> 石浦義彦<金沢泉丘高教諭> : 障害児学校部: 南進<県立養護学校教頭>
* 加賀地区	: 小学校部: 穴田孝子<三谷小校長> 川筋登史己<向本折小教頭> 市村良二<木場小教諭> : 中学校部: 阿戸壮一郎<丸ノ内中教頭> : 高校部: 東野洋子<小松市立女子高教諭> 北室正枝<金沢西高講師> : 障害児学校部: 川上千鶴子<小松養護学校高等部主事>
* 能登地区	: 小学校部: 西野和代<天神山小学校長> 福田教導<金ヶ崎小学校教頭> : 高校部: 堀喜代子<飯田高校教諭> 大場豊治<七尾高校教諭>
事務局	: 事務局長: 永江芳教<金沢商高教諭> : 副事務局長: 久田英夫<金沢中央高校教諭> 中川晃成<館野小教諭> : 庶務部: 部長・中田稚子<森本中教諭> 副部長・宮嶋雅美<明和養護学校教諭> : 会計部: 部長・佃さえ子<千代野小教諭> 副部長・八田和幸<鳴和中教諭> : 研究部: 部長・金田京子<宇ノ気小教諭> 副部長・嵐雪絵<金大付属中講師> : 会報部: 部長・板橋法子<河南小教諭> 副部長・西尾恵美子<中島小教諭> 大坂育代<湯野小教諭> : 研修部: 部長・八田和幸<鳴和中教諭> 副部長・北村千恵<山中小教諭> : 調査部: 部長・大浦努<大浦小教諭> 副部長・宮嶋聡美<松波小教諭> 西川真理<野々市小教諭>

11. 15 第4回全国大学書写書道教育学会・平成元年度全国大学書道学会
~17・平成元年度財団法人全国書道教育部門会《後援》
12. 1 第1回理事会 [金沢商業高等学校]
12. 10 『石川県書写書道教育』(創刊号)発行

1990. 5. 18 第2回理事会 [金沢商業高等学校]
 (平成 2年) 10. 1 『石川県書写書道教育』 (第2号) 発行
11. 19 第1回石川県書写書道教育研究大会
 [金沢市立南小立野小学校・金沢市立野田中学校・石川県立金沢泉丘高等学校]
 第3回理事会
1991. 2. 23 第4回理事会
 (平成 3年) 3. 1 『石川県書写書道教育』 (第3号) 発行
 6. 4 第5回理事会 [金沢商業高等学校]
 10. 30 『石川県書写書道教育』 (第4号) 発行
11. 18 第2回石川県書写書道教育研究大会
 [野々市町文化会館・野々市町立野々市小学校・石川県立養護学校]
 第6回理事会
1992. 3. 26 第7回理事会 [金沢ガーデンホテル]
 (平成 4年) 3. 30 『石川県書写書道教育』 (第5号) 発行
 5. 28 第8回理事会 [金沢中央高等学校]
 10. 20 『石川県書写書道教育』 (第6号) 発行
11. 18 第3回石川県書写書道教育研究大会 [金沢市立鳴和中学校]
 第9回理事会
1993. 3. 30 『石川県書写書道教育』 (第7号) 発行
 (平成 5年) 6. 4 第10回理事会 [金沢中央高等学校]
11. 18 第4回石川県書写書道教育研究大会
 [石川県立金沢商業高等学校・金沢市立富樫小学校・石川県立金沢泉丘高等学校]
 第11回理事会 (第5回大会を小松市にて開催することを決定する)

第5回石川県書写書道教育研究大会経過報告

1994. 2. 9 小松市教育会書写研修会研究授業 文字の中心「地球」 [小松市立安宅小学校]
 (平成 6年)
3. 11 第38回石川県書写書道教育懇談会
4. 27 第39回石川県書写書道教育懇談会
5. 11 小松市教育会書写部会
5. 24 第40回石川県書写書道教育懇談会
6. 1 小松市教育会書写部会
6. 4 第12回理事会 [金沢中央高等学校]
 第4回石川県書写書道教育研究大会第1回実行委員会
 第4回石川県書写書道教育研究大会要項決定
7. 6 小松市教育会書写部会
7. 15 第1次案内発送
9. 2 第41回石川県書写書道教育懇談会
9. 14 大会公開授業指導案検討会 (小松地方教育事務所)
9. 15 第2次案内発送
9. 26 小松市立安宅小学校校内研究会：事前授業研修
10. 3 第42回石川県書写書道教育懇談会 (小松市立向本折小学校)
10. 14 第5回石川県書写書道教育研究大会第2回実行委員会

平成6年度 石川県書写書道教育連盟役員 (敬称略)

- 名誉顧問 金肥子 曾保政 元石川 金沢大 学学長 >
 顧問 久肥子 正保二 石川口 沢大教 育学長 >
 相談役 北西田 藤吉 久田久信 氷田茂良 横西清
 参与 吉田 藤 森登夫 川大 学教育 学部長 >
 会長 石川 県教育 委員 会学 校指 導課 長] 安田 俊彦
 副会長 [石川 私立 幼稚 園協 会理 事書 写部 長] 源 通成 < 妙源 寺幼 稚園 園長 >
 [石川 市中 小学 校教 育研 究会 習字 部 長] 河 本隆 成 < 金沢 市立 西南 部小 学校 校長 >
 [金沢 市中 小学 校教 育研 究会 習字 部 長] 山 森守 守 < 金沢 市立 鳴和 中 学校 校長 >
 [石川 県高 等学 校教 育研 究会 書道 部 長] 南 谷直 彦 < 県立 津幡 高等 学校 校長 >
 [石川 県特 殊教 育諸 学校 校長 会] 藤 田正 則 < 県立 明和 養護 学校 校長 >
 [石川 書写 の会 会長] 河 本隆 成 < 兼 任 >
 [金沢 大 学(教育 学部) 書 写 書 道 教 育 担 当 者] 押 木秀 樹 < 金沢 大 学 教育 学部 助 教授 >
 理事 長 長 : 幼・保 部 : 中 山武 久 < 県立 金沢 泉 丘 高 等 学 校 教 諭 >
 副理 事 長 : 小 学 校 部 : 板 本 爽 見 < 金 沢 市 立 中 央 小 学 校 教 諭 > [市 小 教 研 書 写 副 部 長]
 : 中 学 校 部 : 木 本 峰 生 < 七 尾 市 立 徳 小 学 校 教 諭 >
 : 高 校 部 : 松 本 勝 雄 < 中 島 町 立 熊 野 田 中 学 校 教 諭 > [市 中 教 研 習 字 副 部 長]
 : 盲・ろう・養護 学 校 部 : 干 谷 村 修 次 < 小 松 市 立 御 幸 中 学 校 教 諭 >
 : 盲・ろう・養護 学 校 部 : 林 昭 悦 < 県 立 津 幡 高 等 学 校 教 諭 >
 : 盲・ろう・養護 学 校 部 : 依 輝 明 < 県 立 明 和 養 護 学 校 教 頭 > [県 特 殊 教 育 諸 学 校 教 頭 会 理 事 長]
 監事 山本 穆子 < 向本 折 小 学 校 校長 > 奥井 絹江 < 七尾 市 立 有 磯 小 学 校 校長 >
 理事 : 県 教 委 学 校 指 導 課 : 山田 寿一 < 七尾 地 方 教 育 事 務 所 >
 [小 学 校 ・ 中 学 校 (国 語 科 書 写) 担 当 指 導 主 事] 清水 実
 [高 等 学 校 (芸 術 科 書 道) 担 当 指 導 主 事]
 * 金 沢 地 区 : 幼・保 部 : 青 山 洋 子 < み どり ・ か わ い 幼 稚 園 副 園 長 >
 : 小 学 校 部 : 林 道 子 < 中 央 小 学 校 教 諭 > 大 浦 努 < 千 坂 小 学 校 教 諭 >
 : 中 学 校 部 : 中 川 晃 成 < 菅 原 小 学 校 教 諭 >
 : 高 校 部 : 福 島 網 義 < 大 徳 中 学 校 教 諭 > 古 本 佳 世 < 芝 原 中 学 校 教 諭 >
 : 大 学 部 : 石 北 正 枝 < 金 沢 美 大 講 師 >
 : 盲・ろう・養護 学 校 部 : 平 吉 次 < 県 立 明 和 養 護 学 校 教 頭 >
 * 加 賀 地 区 : 小 学 校 部 : 川 筋 登 史 己 < 東 陵 小 学 校 教 諭 > 表 英 治 < 片 山 津 小 学 校 校長 >
 : 中 学 校 部 : 阿 戸 壯 一 郎 < 小 松 市 教 育 委 員 会 学 校 教 育 課 長 >
 : 高 校 部 : 小 座 間 美 智 子 < 錦 城 中 学 校 教 諭 >
 : 高 校 部 : 東 野 洋 子 < 小 松 市 立 女 子 高 校 教 諭 >
 * 能 登 地 区 : 小 学 校 部 : 福 田 教 導 子 < 越 路 小 学 校 教 頭 > 濱 和 子 < 豊 川 小 学 校 教 頭 >
 : 中 学 校 部 : 野 村 美 智 津 子 < 石 崎 小 学 校 校長 >
 : 高 校 部 : 永 井 喜 代 子 < 北 嶺 中 学 校 校長 >
 : 盲・ろう・養護 学 校 部 : 柳 南 進 < 県 立 上 産 高 校 教 諭 > 大 場 豊 治 < 富 来 高 校 教 諭 >
 事務局 : 事 務 局 長 : 久 田 英 夫 < 金 沢 中 央 高 校 教 諭 >
 : 副 事 務 局 長 : 中 川 晃 成 < 菅 原 小 学 校 教 諭 >
 : 庶 務 部 長 : 岩 田 稚 子 < 森 本 中 学 校 教 諭 > 副 部 長 ・ 山 口 雅 美 < 新 豎 町 小 学 校 教 諭 >
 : 会 計 部 長 : 北 村 千 恵 < 湖 北 小 学 校 教 諭 > ・ 山 沢 聡 美 < 片 山 津 中 学 校 教 諭 >
 : 研 究 調 査 部 長 : 佃 さ え 子 < 美 川 小 学 校 教 諭 > 副 部 長 ・ 西 尾 恵 美 子 < 辰 口 中 央 小 学 校 教 諭 >
 : 会 報 部 長 : 水 上 真 由 美 < 金 大 付 属 中 学 校 講 師 >
 : 会 報 部 員 : 板 橋 法 子 < 安 宅 小 学 校 教 諭 > 副 部 長 ・ 北 野 京 子 < 宇 ノ 気 小 学 校 教 諭 >
 : 会 報 部 員 : 坂 井 雪 絵 ・ 寺 井 純 子 < 蛸 島 小 学 校 教 諭 > ・ 唐 津 清 美 < 福 浦 小 学 校 講 師 >
 : 会 報 部 員 : 八 田 和 幸 < 鳴 和 中 学 校 教 諭 > 副 部 長 ・ 松 井 瑞 代 < 大 聖 寺 高 校 講 師 >
 : 会 報 部 員 : 中 辻 育 代 < 浜 小 学 校 教 諭 > ・ 田 中 学 < 高 岡 中 学 校 講 師 >
 : 会 報 部 員 : 塩 田 由 香 < 松 任 中 学 校 講 師 >

第5回石川県書写書道教育研究大会役員 一敬称略一

顧問 金子曾政 肥田保久

参与 北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 氷田茂良
横西 清 吉田一郎 森川登夫

大会長 藤 則雄

副大会長 安田俊彦 源 通 河本隆成 山森 守 南谷直彦
藤田正則 押木秀樹 中山武久

実行委員長 谷村修次

副実行委員長 板本爽見 木本峰生 山本穆子 松本勝雄 松本隆久
林 昭悦 俵 輝明

実行委員 【部担当】 【企画研修部】 山本穆子

【研究集録編集部】 稲田実千代

【記録部】 富沢美智子

【会計部】 釜本紀美子

大会事務局 【事務局長】 久田英夫 【副事務局長】 中川晃成

○はチ-7 【庶務部】 0岩田稚子 s 山口雅美 北村千恵 山沢聡美
s はサチ-7 (庶務部)

【集録編集部】 0八田和幸 s 松井瑞代 中辻育代
(会報部) 田中 学 塩田由香

【記録部】 0北野京子 s 坂井雪絵 寺井純子 唐津清美
(研究調査部)

【会計部】 0佃さえ子 s 西尾恵美子 水上真由美
(会計部)

石川県書写書道教育連盟 規約

- 第 1 条 (名 称) 本会は、石川県書写書道教育連盟と称する。
- 第 2 条 (本部・事務局) 本会の本部を金沢大学教育学部内におき、事務局を事務局長の在勤校におく。
- 第 3 条 (目 的) 本会は、授業研究を中心として、県内の幼稚園(保育園・保育所)・小学校・中学校・高等学校・大学(短期大学・専門学校)・障害児学校等の一貫した書写書道教育と書道文化の更なる充実発展に努めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とする。
- 第 4 条 (事 業) 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 関連する学会・研究会・内外諸機関等との連絡と協力
 - (4) 講演会・講習会の開催
 - (5) 調査研究
 - (6) その他必要な事業
- 第 5 条 (組 織) 本会は、県内の幼稚園(保育園・保育所)・小学校・中学校・高等学校・大学(短期大学・専門学校)・障害児学校の教員及び本会の目的に賛同するものをもって組織する。
- 第 6 条 (役 員) 本会に、下記の役員をおく。
- | | | | | | |
|------|-----|-------|-----|-----|-----|
| 会 長 | 1 名 | 副会長 | 若干名 | 理事長 | 1 名 |
| 副理事長 | 若干名 | 監 事 | 若干名 | 理 事 | 若干名 |
| 事務局長 | 1 名 | 副事務局長 | 若干名 | | |
- (1) 事務局には、次の六部を設け、各部とも、部長 1 名 副部長 1 名、部員若干名をおくものとする。
・庶務部・会計部・研究部・会報部・研修部・調査部
 - (2) 本会に、名誉顧問・顧問・相談役・参与を推戴することができる。
 - (3) 役員を選出と任期は、下記のように定める。
 - (I) 役員は理事会において選出する。
 - (II) 役員の任期は一か年とする。ただし、再任は妨げない。
- 第 7 条 (理 事 会) 本会の理事会は、本会の運営及び事業に関する重要事項を審議決定する
- (I) 理事会は、必要に応じて、会長が召集する。
 - (II) 理事会は、第 6 条における、会長・副会長・理事長・副理事長・監事・理事・事務局長・副事務局長・事務局各部長によって構成する。
- 第 8 条 (会 計) 本会の経費は、会費及びその他の収入をもってこれにあてる。
- 第 9 条 (会計年度) 本会の会計年度は、4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 3 1 日に終わる。
- 第 10 条 (監 査) 本会の会計は、監事によって監査をうける。

[附 則]

- 第 11 条 規約の改訂は、理事会の議決を経なければならない。

平成 元年 8 月 29 日 制定
平成 2 年 5 月 18 日 一部改正

光村図書版・小学校『書き方』教授用資料

書き方掛図 新発売

1年・2年各1巻 定価各9,700円(本体9,417円)
A全判 2色刷り 各巻12枚

書き方掛図(毛筆)

3年～6年各1巻 定価各12,900円(本体12,524円)
A全判 2色刷り 各巻16枚

毛筆書き方ビデオ

初級編・中級編・上級編 定価各9,500円(本体9,223円)
VHS・各巻約30分・解説書つき

「指導ハンドブック 字形と筆順」

小・中学校の漢字配当別に分類した2部構成 見やすく使いやすい
縦組みハンディーな四六判 定価1,500円(本体1,465円)

基本字体と字形のポイント 常用漢字・平仮名・片仮名全出

筆順のポイント 毛筆文字で点画の細部まで明示

各種許容形 小学校漢字の点画・字形について幅広く説明

行書体 中学校漢字について2種類揭示

発行 **光村図書出版株式会社**

発売 **光村教育図書株式会社**

〒141 東京都品川区上大崎2-19-9 電話 03-3779-0581

中国品 〓 古硯・印材・筆・墨・硯・紙
国内品 〓 画仙紙・色紙・各種額縁・水墨画用品

文房四宝

文真堂

金沢市尾張町二丁目二一―二八
電話(〇七六二)六四―一八三六

日本・中国を代表する漢字・かなの名書150余種を技法中心に鋭く解説する。臨書・做書作品を多数収録した書法百科事典。

実技書の古典

飯島春敬編・A4判・三九六頁 定価(〇〇九四円)税込

陳廷祐著・成家徹郎訳
四六判・二八〇頁 定価二五〇〇円税込

書の美学

中国三千年の書作品や古今東西の芸術理論を縦横に取り上げながら、書の理論と美学の原理を分析・解明する。

A5判上製本・カバー付・ケース入り・本文七八八頁・カラー口絵四頁 定価七八〇〇円税込

書道 名言辞典

宇野雪村
西林昭一 [編著]
福本雅一

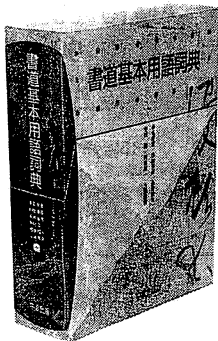


書の心と智慧を凝縮した、珠玉の名言を集大成！
初めての書の名言辞典！

好評

増刷出来!!

創業 50周年 記念 出版



書道基本用語辞典

「書」のあらゆる分野の用語を
1冊にまとめた書道百科辞典

↑ 人・作品・文房四宝・教育用語まで見出し語1200項目
↑ 用語の解説に興味深い余話・故事来歴を加えた読む「辞典」

■編集委員■

春名好重・杉村邦彦・永井敏男・中村 淳・西林昭一・三浦康廣

A5判上製本 フツクケース入 1120ページ 図版約500点

定価 10,000円(税込)

し て ん 引 く 読 む
[詞 典 = 辞 典 + 事 典]

書の基本資料 全19巻 春名・三浦・杉村 編
250~380円(税込)
平成4年度全巻刊行



中教出版

本社：東京都文京区向が丘1-5-2
水上ビル
TEL 03(5800)3011 FAX 03(5800)3059

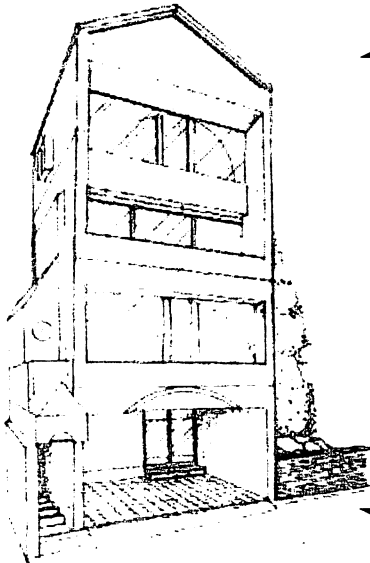
筆・墨・紙・硯・額縁

書道用品卸

文房四宝 絃 貴 堂

〒921 金沢市伏見台1丁目1-1 ☎ (0762) 80-2298

あなたの夢をお聞かせください。
自由設計だからできる明るくゆとりある快適空間。



限られた敷地に余裕の居住スペース。
夢の3階建て。

ローコスト住宅セレッツ誕生。

ローコスト住宅仕様フェア開催中

平日営業 AM10:00～PM7:00

日曜営業 AM10:00～PM5:00

9月26日～住宅金融公庫受付開始

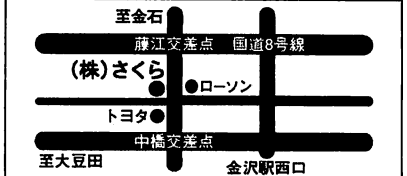
3階建て住宅

木造・鉄骨・鉄筋コンクリート



株式会社さくら

一級建築士事務所 知事登録 第12697号 一般建築業 知事登録 第(5)第12249号



フリーダイヤル 0120-71-0505



第5回
石川県書写書道教育研究大会

NSC 中村産業株式会社

中村真児

〒920-03 金沢市専光寺町ヲ 240

TEL (0762) 67-6118

FAX (0762) 67-6670

公的資格を取ろう!!

文部省
認定

硬筆書写・毛筆書写検定

●後援—全国都道府県教育委員会

●試験の種類と程度

4級…基礎的な技術及び知識

3級…一般の技術及び知識

2級…専門的技術及び知識

1級…高度な専門技術及び知識

●試験日(同日実施)

◎平成6年度第2回…6年11月20日(日)

◎平成6年度第3回…7年1月28日(土)

(毎年6月、11月、翌年1月の3回実施)

●試験地

全国主要都市、20名で試験会場設置可

●受験者携参考書刊行(申し込みは協会へ)

硬筆:手びきと問題集(定価800円〒310円)

毛筆:手びきと問題集(定価900円〒310円)

●受験料

	1級	2級	3級	4級
硬筆	4,120円	2,060円	1,550円	1,030円
毛筆	4,640円	2,680円	1,850円	1,030円

●特典

書写・書道教育に最適。文部大臣より優秀者の表彰。公的資格が得られ、進学、就職に有利。

■願書請求方法—宛名明記の返信用封筒(80円切貼付)と切手200円を同封し、協会にご請求下さい。

〒170 東京都豊島区南大塚3-22-11 TEL03-(3988)3581(代)

財団法人 **日本書写技能検定協会**

とどけ、心のメッセージ。

私たちは、印刷に創造性、文化性そして社会性を求めつづけます。

次代への遺産を
石川近代文学全集
全19巻・別巻1 逐次刊行中



新しい時代へ、新しい発想で

鞆登印刷株式会社

本社 ● 金沢市武蔵町7番14号 ☎(0762)33-2550 FAX(0762)33-2559

出版部 ● 金沢市高岡町5番14号 ☎(0762)22-4595 FAX(0762)22-4594

工場 ● 松任市善区町293番地 ☎(0762)75-1763 FAX(0762)76-7664

額縁が安い。画材が安い!!

野々市のつぎ街道

がくぶち屋

HIROTA

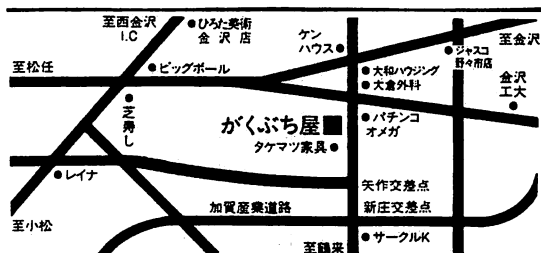
100坪の売場にぎっしりと2500点

毎週木曜日定休日

野々市町白山町104

TEL 0762-94-0203

FAX 0762-94-7050



大和ハウジングより600m鶴来寄り



日本各地に
当日配達

全酒信連

まごころのがよう店

和洋酒・ビール・たばこ
塩・調味料・清涼飲料水

酒の林屋

〒921 金沢市米泉町4丁目25-1

☎ (0762) 41-5091

FAX (0762) 41-0298

① 第5回石川県書写書道教育研究大会
— 国内150支店、海外9支店のネットワーク —

エフエフエフ

日本の旅

世界の旅

VIFA



贈ります、あなたの心にのこる旅

東急観光

金沢支店 金沢市片町2丁目1-1

TEL 0762-22-0109

てらこ
手良系墨液

伝統の黒に
より近い墨液

墨の精カラーフレンド墨液

200cc 250円

たのしいカラーラベルが目印です

株式会社 **墨運堂**

〒630 奈良市杉ヶ町39番地の1
☎ (0742) 26-5611(代)



伝統的工芸品指定 熊野筆 高級書道用筆墨硯

株式
会社

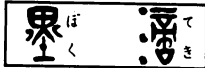
久保田 隼

本 社 広島県安芸郡熊野町7505-3 TEL 082 (854) 0009 (代)
東 京 東京都台東区台東3-42-4 書道殿堂東京久保号ビル

伝統と技術をほこる銘墨

呉竹墨

そのまま書ける書道用液



個性ある色調

油煙・青墨・茶墨・淡墨・各種

作品用高級液体墨

古墨調液 純松煙磨墨液 書芸呉竹

墨韻

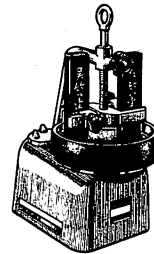
松潤



プロが選んだ高性能機種

呉竹電動墨すり機

- ☆スピード磨墨
- ☆手ずりの墨色
- ☆操作簡単



小型・軽量
L型
PAT・P

セット価格
¥37,000
(天輪硯中・付)

株式
会社 **呉竹精昇堂**

〒630 奈良市南京終町7丁目576
0742(50)2050 東京・札幌・仙台・福岡

サン美フレーム は

作品の女房です。

作品をしっかり守り、その魅力を十二分に引き立てるフレーム。
作品の心を大切に思う気持ちが
ひとつひとつのサン美フレームにこめられています。

額縁の総合専門メーカー



株式会社 **サン美術工芸**

本社・工場/愛知県岡崎市 6-33 (〒833)
額縁の総合専門メーカー 〒ス 0786 (26) 3851

筆

株式会社

入木筆

博文堂本舗

〒639-11 大和郡山市柳1の1
TEL 大和郡山 07435-2-3251(代)
FAX 07435-2-3253

書道額・和額・日本画額・洋額・別寸額・特注品・
風・衝立・軸装の製造 販売

大昌

- 本社 / 広島県甲奴郡上下町 ☎ 084762-3517(代) FAX 084762-4528
- 東京営業所 / 東京都三鷹市下連雀1-16-5 ☎ 0422-42-3085
- 福山営業所 / 広島県福山市新涯町2-51 ☎ 0849-54-4715(代)

日本の筆で世界に書を

伝統的工芸品熊野筆生産業者
熊野筆センター



株式会社 休園

- 併設/全日本書作家錬成道場
- 本社 / 〒731-42 広島県安芸郡熊野町1879 ☎(082)854-0019(代表)
- 広島店 / 〒730 広島市中区八丁堀5-29 ☎(082)222-1919

紙・文具・OA機器 }
OA用品・スチール家具 } 販売

有限会社 やまや紙文具

〒923 石川県小松市幸町1丁目42番地
TEL 0761-22-6333 (代) FAX 0761-24-4888



MAEDA GROUP

カズオ工業 (株)

- ・クレーン車各種貸付
- ・嵩工事一式
- ・鉄骨工事一式
- ・機械運搬
- ・重量物運搬
- ・山留・支保工架払工事一式

代表取締役

木下外治

〒920-03 金沢市中屋町西447-1

TEL(0762)49-1215 FAX(0762)49-6447

教材教具・視聴覚機器・OA機器・ワープロ・パソコン

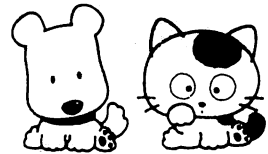
株式会社 ダイシン

金沢市米泉8丁目105

TEL 43-1555

FAX 43-1783

学校教材・文具・事務用品



藤田商店

小松市新鍛冶町13の1

TEL 0761-21-3278



星山石材株式会社

〒921 金沢市長坂3丁目12番22号

TEL (0762) 42-1644 (代)

FAX (0762) 42-9493

工場 41-4034

菊川ショールーム 61-0333

i-KLS

印刷・情報をデザインする……

株式会社 アイカス

〒929-03 石川県河北郡津幡町舟橋に26-1
TEL (0762) 89-5111(代)
FAX (0762) 89-5112

本・学用品・事務用品・学校用品

BOOKS

スガイ

本店/TEL89-4131(代)FAX88-3799
営業時間AM 9:00~PM10:00
スカール店/TEL88-3173 FAX88-3860
営業時間AM10:00~PM 7:00
太田店/TEL88-4110 FAX88-4510
営業時間AM10:00~PM11:00

毛筆三体帖
狩田登山著
2200円(税別)
常用漢字と人名用漢字の楷行草字典。字体正整、大字中字手本に適合

あけぼの帖
中村象園著
2000円(税別)
条幅・料紙・色紙・短冊等 漢字かな交じり文の書き方範例集

実用書式の研究
神谷重寿・風岡善二著
2200円(税別)
包紙や手紙・封状・表札・目録・掲示
他 正しい書式を筆とペンで例示

木簡の書法
鶴木大寿著
2200円(税別)
大きな臨書手本と詳しい木簡解説
で書法を明かす、創作便利例多

明解書道史
加藤達成・小名木東郷著
3000円(税別)
千300 中国・日本の書を豊富な大判図版で綴った目でみる書道史

硬筆書写検定

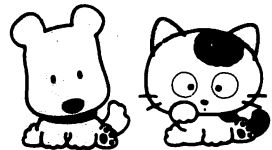
4級合格のポイント
900円(税別)

3級合格のポイント
1100円(税別)

1.2級合格のポイント
1700円(税別)

日本習字普及協会
113東京都文京区本郷3-4-5

学校教材・文具・事務用品



奈良教材文具店

石川郡美川町字新町ル114の2

TEL 0762-78-2630

カラープリント特急仕上げ！ 1時間仕上げ可能です。
カラープリント・証明写真
大切な写真だから……

写真の **ミヤノ**

河北郡津幡町津幡ハ96-1

・津幡本店 ☎89-4181 ・金沢新神田店 ☎91-8022
・ハロータウン
モリモト店 ☎57-3780 ・スカール店 ☎88-3187

全 国
菓子博

名誉大賞受賞

エム 遊仙華 八っ房の梅 俱利伽羅山 不動も赤か

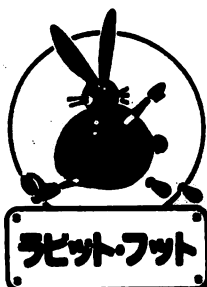
御進物に
お茶のひとつときに
御愛用下さい

小泉菓子舗
津幡町 TEL 89-2637

教材・教具・OA機器・その他

(有) タカセ教材

小松市錦町28番地 TEL (0761) 21-2186 FAX (0761) 21-4868



コンビニエンス・ストア
Rabbit Foot

津幡店／河北郡津幡町浅田丙48-1 TEL(0762)89-4612
宇ノ気店／河北郡宇ノ気町内日角中12 TEL(0762)83-5302



この道四百年・創業慶長十四年(1609年)



株式会社 浅野太鼓

浅野太鼓祭司株式会社

太鼓の里資料館
商標登録

本社 ■〒924松任市福留町148
TEL0762(77)1717代 FAX0762(77)2228

広告看板一般

有限会社 **アサダ・デザイン看板**

代表取締役 浅田 徹

野々市町本町 4 丁目16-31 TEL48-2367(代)

本とのふれあい



長野書店

本店 小松市サンプラザ三日月角☎22-1167代
ブックランド 小松市白旗町1丁目4番地☎24-1178

東井印刷所

☎ 0762-80-1625
FAX0762-80-1925
金沢市糸田新町10-1

写真・ビデオ制作 光画社

〒920 金沢市尾張町1丁目7-8

☎金沢 0762-64-3288(代) FAX 0762-62-4537

信頼される旅づくり

ツーリストは、いつも
新しい修学旅行を
見つめています。

グループ行動・自主研修、田
植え・地引き網などの勤労体験、陶芸・
染物などの伝統工芸体験、スキー体験を盛り込
んだスポーツ学習修学旅行、そして海外修学旅行…と、近
畿日本ツーリストでは、学校の教育方針を尊重し、個性豊かでプレッ
シユな修学旅行を提案・お世話いたします。




近畿日本ツーリスト

◎運輸大臣登録一般旅行業第20号

金沢支店 〒920 金沢市片町1-1-34第一生命ビル

☎(0762) 32-0571

 ガスが創る、これからの住まいと暮らし。

都市ガス・プロパンガス

小松ガス株式会社

取締役社長 和田 衛

主な営業品目

〔都市ガス事業、LPガス事業、ガス工事設計施工〕 本社 小松市土居原町31番地 TEL.0761-22-0515
〔簡易ガス事業、各種ガス機器販売〕 工場 小松市園町チ30番地 TEL.0761-24-0525

各種表装 掛軸 額縁

美術の大谷

小松市本折町84 22-1113

書画芸術の明日を創る

筆・紙・墨・硯

もろやろん

筆 文

株式会社 賛交社

本社 京・山科区勸修寺東出町4-1 ☎075(572)8964
二条店 京・中京区河原町通二条西入 ☎075(222)0390
三条店 京・中京区高倉通三条上ル ☎075(255)0054
京都文化博物館ろうじ店舗

ユニック 45

じつりと腰を据えて楽しむワカ鳥。
バリ島の休日5・6日間

108,000円より

東武トラベル
通関大正倉庫一般旅行業務5号

金沢支店
〒920 石川県金沢市高岡町1-45
(大同生命ビル1F)
☎0762(31)0190 00



宝石・時計・メガネ・ゴルフ用品
金沢宝石鑑別センター

日本宝石コンサルタント協会会員
株式会社

伊田

本店 金沢市藤三町2-3-11 7A7ラザビネ 金沢市臨江町上丁306
〒920 TEL(0762)21-7162 (平和堂) 〒920 TEL(0762)34-1701
FAX(0762)21-3409 FAX(0762)34-1702
パティオ店 金沢市野町4-8(4F)(1F) ポルテ金沢 金沢市本町2丁目15-1
〒920 TEL(0762)22-8842 (龍眼カフェ) 〒920 TEL(0762)65-5540
FAX(0762)22-8842 FAX(0762)65-5541

sports shop

いい汗ながそう

MM スポーツしよう
野々市町高橋町19-18

スポーツ

TEL (0762) 46-2488

日本画・洋画

襖
貼製
工作
事部

屏額掛
風装軸

美術部

岡田錦成堂

安江町13表具屋小路 ☎金沢 21-3658

ゆたかな知性のおアシス

書林

KOHRINBO I(X)本店 ☎(0762)20-5011

駅西店 ☎31-2822 アルプラザ店 ☎24-1966
城北店 ☎52-1461 大額店 ☎96-0230
野々市店 ☎46-5001 森本店 ☎57-5851

本社/〒920 金沢市本多町3-2-1
TEL:(0762)32-3533 FAX:32-3710



金沢市片町2-21-6シンニチビル2F
Phone 0762-62-1919 〒920

良書を普及し続けて30周年

株式会社 ほるぷ 金沢支店

〒920 金沢市北安江373の2 (信開北安江ビル2階)
☎0762 (63) 5271

石津表具店

京都市中京区壬生馬場町16-5
TEL 075 (812) 3318

視るもよし
聴くもよし

これほど

読書は
マルチ
メモリー

中西書店

石川県能美郡寺井町寺井ラ84
TEL0761-57-3311(代)

—UKAWA 言葉をかたちに、心をいろに。

鵜川印刷株式会社

日本語印刷情報処理システム—般商業印刷—シール—
本社・工場 石川県小松市河田町丁33番地
TEL (0761) 47-0188(代)
FAX (0761) 47-0077
金沢営業所 石川県金沢市窪7丁目267番地
TEL (0762) 47-0353

各種新車・中古車販売・修理・車検・保険

有限会社 タカノ自動車サービス

代表取締役 高野力誠

〒923 小松市本江町 へ 75
TEL (0761) 24-0205
FAX (0761) 24-6262
自宅TEL (0761) 24-6345

事務用品・オフィス家具・OA・教材

高南店

加賀市山代温泉19区
TEL 6-0081(代) FAX 6-0810

あしたの教育を拓く

- 暁教育図書 の 教育図書・教材
 - 毎日の学習教材「はつらつ」
- ### 北陸暁図書販売株式会社

金沢市石引4丁目4-4
☎(0762) 32-2425(代)

参考書 心理検査 教材

株式会社

布村教材社

金沢市小坂町中 35-4
TEL (0762) 51-1702

祝 第5回石川県書写書道教育研究大会

きものと洋品

たかもり

津幡中央銀座商店街

TEL 0762-89-2355



教材社

金沢・北安江

TEL 31-6773

FAX 31-6940

学校教材なんでも

株式会社 日本果菜流通センター

〒100-0001 東京都千代田区千代田



東京中央卸売市場 南五区南五区

TEL 03-5621-3333

東京都千代田区千代田



TEL 03-5621-3333

東京都千代田区千代田

TEL 03-5621-3333

FAX 03-5621-3333